

MATSU BARA SITE

松原遺跡 III

主要地方道中野更埴線道路改良事業にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

長野市教育委員会

序 文

真田十萬石の城下町として知られている長野市松代町には、真田家の霊屋、旧文武学校、松代城跡をはじめ数多くの史跡等の文化財に恵まれております。またなおも時代を遡りますと、考古学的に重要な古墳や遺跡も枚挙に暇がありません。私たちは、これら祖先の残した貴重な文化遺産を大切に保存し、将来に永く伝えていくべき責務があるものと考えます。

一方社会の急激な変化とともに、高速道路・新幹線などの大型開発事業も最盛期を迎えていると言えます。今日「開発」と「文化財保護」とは、非常に難しい問題となっておりますが、相互のバランスを十分に検討し、後顧に憂いを残さぬよう努力を惜しまぬ姿勢が肝要と思います。

松原遺跡の在する松代町東寺尾一帯は、長いもやぶどう等農作物の和な耕作地帯でしたが、上信越自動車道建設事業を契機として、様々な関連事業が計画・実施されております。当教育委員会は過去に、長野南農協集出荷場建設にともなう『松原遺跡』、市道松代東111号線道路改良にともなう『松原遺跡Ⅱ』を発掘調査し報告書を刊行しておりますが、この度発掘調査しました松原遺跡は、上信越自動車道の関連事業である県道中野更地線道路改良にともなう調査でした。バイパス区間と拡幅区間からなる事業面積は11,700㎡に及んでおります。

ここに長野市の埋蔵文化財第58集『松原遺跡Ⅲ』を刊行いたしました。広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、委託者である長野県長野建設事務所の皆様をはじめ、様々な形で調査に携わっていただきました皆様には、本報告書の上梓をもって深甚なる謝意を表します。

平成5年3月

長野市教育委員会
教育長 奥村秀雄

例 言

- 1 本書は、「主要地方道中野更地線道路改良事業」に伴い、平成2～4年度にわたり継続して実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、長野県長野建設事務所長丸山昌義（平成2年度）・伝田今朝夫（平成3年度）・紅粉 彰（平成4年度）と長野市長 塚田 佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会が担当し、長野市埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市松代町東寺尾字蛭川添・北掘・高畑・松原西・松原東・観音前・松原西北にわたり、3年間の保護対象面積は11,700㎡に及ぶ。
- 4 本書の第II章第1節については和田 博氏（長野市立博物館専門員）、第IV章第4・5節は久保勝正（三重県立斎宮歴史博物館学芸員）・久保邦江（奈良市埋蔵文化財調査センター技術史員）の両氏、第IV章第10節については西沢寿晃氏（信州大学医学部第2解剖学教室）より玉稿を賜った。銘記して謝意を申し上げたい。
- 5 本書作成は矢口の指導の下飯島・寺島が担当した。整理作業は各調査員が分担し、執筆分担は次のとおりである。

山崎 佐織	第I章第2節、第II章第2節(1)
山田美弥子	第II章第2節(2)、第IV章第6節
寺島 孝典	第III章第3節(1)～(3)、(5)、第IV章第1・3節
中殿 章子	第IV章第7・8節
飯島 哲也	その他

- 6 発掘調査の実施に際し、事業委託者である長野建設事務所におかれては埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、絶大なご協力を賜った。また現場における調査及び本書作成にあたっては下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。

青木一男、穴澤義功、石川日出志、石黒立人、石坂俊郎、上田典男、白居直之、宇都宮公子、岡田正彦、
黒沢 浩、小山岳夫、白沢勝彦、新谷和孝、関沢 聡、鶴田典昭、直井雅尚、西川修一、西山克己、
橋本清一、原 明芳、町田勝則、宮下健司、百瀬長秀、森嶋 稔、山中 健
(財)長野県埋蔵文化財センター（敬称略）

- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）で保管している。
なお、出土遺物の注記記号は「MMK」と表記してある。



凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。




- 1 各調査区の概要については、各地区毎に第三章第1節において記述した。
- 2 実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。なお、磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。
- 3 遺構の測量は、平面直角座標系のVIII系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、仰写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。現場にて1:20の縮尺で基本原因を作成し、本書では基本的に1:80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 4 検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号をもとに、本遺跡に対応させて仮に下記のとおり作成した。



S													T	T r	
A	B	C	D	E	H	J	K	M	N	P	Q	R	X		
竪穴住居	掘立柱建物	環状溝を有する居(平地を式住居?)	溝	井戸	棚列・枕列	土溝墓	土坑	墓	石組・敷石	小穴	製鉄関係遺跡	土遺物集積区	性格不明	トレンチ	トサブイアレンチ

- 5 住居跡等の実測図において、焼土・炭化物の範囲等の区別は下記のとおり網掛けによって表記した。

焼土・焼土痕 炭化物 堅い床の範囲

- 6 検出した遺構と石器・石製品を除く出土遺物の詳細については、第三章第3～5節において時代別及び遺構別に記述した。ただし遺物は出土量が膨大であり、すべての遺物について資料化の義務を果たせなかった。
- 7 石器・石製品については、一括して第四章第4節に掲載した。
- 8 遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図1:4、土器拓影1:3、石器1:1、金属器1:3等に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 9 土器の実測図において、土器の種類や黒色処理・赤色塗彩等は網掛けによって下記のとおり表記した。

弥生土器・土師器 赤色塗彩・須恵器 灰釉陶器

その他陶器類 黒色処理

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第I章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌抄	2
第3節 調査体制	5
第II章 松原遺跡周辺の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	11
(1)考古学的環境	11
(2)文献史的環境	14
第III章 調査成果	17
第1節 調査区の位置と概要	17
第2節 基本層序	50
第3節 弥生時代中期の遺構と遺物	53
(1)竪穴住居跡	53
(2)竪立柱建物跡	135
(3)環状溝跡	138
(4)土壌墓	149
(5)土坑	151
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物	157
(1)竪穴住居跡	157
(2)土壌墓	195
(3)製練炉状遺構	204
(4)櫓状遺構	211
(5)溝跡	212
第5節 中世以降の遺構と遺物	216
(1)溝跡	216
第IV章 まとめ	223
第1節 弥生時代中期後半の竪穴住居跡について	223
第2節 弥生時代中期の土壌墓について	227
第3節 弥生時代中期後半の土器様相	229
第4節 松原遺跡出土の石器・石製品の内容	236
第5節 松原遺跡の石器群の様相	270
第6節 奈良・平安時代のカマドについて	276
第7節 奈良・平安時代の土器について	278
第8節 中世溝跡出土の土器について	281
第9節 松原遺跡の集落範囲について	282
第10節 松原遺跡出土の骨について	284
第V章 結 語	293

挿 図 目 次

第1図	松原遺跡周辺地形図	7	第35図	SA 105遺物実測図	59
第2図	松原遺跡周辺表層地質図	8	第36図	SA 106実測図	60
第3図	松原遺跡周辺地盤図	9	第37図	SA 106遺物出土状況	61
第4図	松原遺跡周辺コンタ図	10	第38図	SA 106遺物実測図 1	61
第5図	松原遺跡周辺遺跡分布図	12	第39図	SA 106遺物実測図 2	62
第6図	松原遺跡周辺地形図	14	第40図	SA 107実測図	63
第7図	松原遺跡周辺字図	15	第41図	SA 107遺物実測図	64
第8図	調査区および既往調査地点位置図	18	第42図	SA 108実測図	64
第9図	A～C区遺構全測図	19 20	第43図	SA 108遺物実測図	66
第10図	D・E区遺構全測図	21 22	第44図	SA 109実測図	67
第11図	F～H・N区遺構全測図	23 24	第45図	SA 109遺物実測図	67
第12図	I・J区遺構全測図	25 26	第46図	SA 110実測図	68
第13図	K・M区遺構全測図	27 28	第47図	SA 110遺物実測図	68
第14図	D区1次面遺構分布図	29	第48図	SA 111実測図	69
第15図	E区1次面・D区2次面遺構分布図	30	第49図	SA 111遺物実測図	69
第16図	B・C区2次面遺構分布図	31	第50図	SA 112実測図	70
第17図	C区2次面遺構分布図	32	第51図	SA 112遺物実測図	71
第18図	B・C区3次面遺構分布図	33	第52図	SA 113実測図	71
第19図	C区3次面遺構分布図	34	第53図	SA 113遺物実測図	72
第20図	D区3次面遺構分布図	35	第54図	SA 114実測図	73
第21図	E区3次面遺構分布図	36	第55図	SA 114遺物実測図	74
第22図	E区3次面遺構分布図	37	第56図	SA 114遺物出土状況	75
第23図	基本土層柱状模式図	51 52	第57図	SA 115	77
第24図	J3区東壁土層断面図	51 52	第58図	SA 115遺物実測図	77
第25図	SA 101実測図	53	第59図	SA 116	78
第26図	SA 101遺物実測図	54	第60図	SA 116遺物実測図	78
第27図	SA 102実測図	54	第61図	SA 117実測図	79
第28図	SA 102遺物実測図	55	第62図	SA 117遺物実測図 1	80
第29図	SA 102遺物出土状況	55	第63図	SA 117遺物実測図 2	81
第30図	SA 103実測図	56	第64図	SA 117遺物出土状況実測図	82
第31図	SA 103遺物実測図	57	第65図	SA 118実測図	83
第32図	SA 104実測図	57	第66図	SA 118遺物実測図 1	84
第33図	SA 104遺物実測図	58	第67図	SA 118遺物実測図 2	85
第34図	SA 105実測図	58	第68図	SA 119実測図	86

第 6 9 図	S A 119遺物実測図	86	第 103図	S A 135実測図	113	
第 7 0 図	S A 120実測図	87	第 104図	S A 135遺物実測図	113	
第 7 1 図	S A 120遺物実測図 1	88	第 105図	S A 137実測図	114	
第 7 2 図	S A 120遺物実測図 2	89	第 106図	S A 137遺物実測図 1	115	
第 7 3 図	S A 122実測図	90	第 107図	S A 137遺物実測図 2	116	
第 7 4 図	S A 122遺物実測図	91	第 108図	S A 138実測図	116	
第 7 5 図	S A 123実測図	92	第 109図	S A 138遺物実測図	116	
第 7 6 図	S A 123遺物実測図	92	第 110図	S A 139実測図	117	
第 7 7 図	S A 124実測図	93	第 111図	S A 139検出状況	118	
第 7 8 図	S A 124遺物実測図	93	第 112図	S A 139遺物実測図	119	
第 7 9 図	S A 125実測図	94	第 113図	S A 140実測図	120	
第 8 0 図	S A 125遺物実測図 1	95	第 114図	S A 140遺物実測図	121	
第 8 1 図	S A 125遺物実測図 2	96	第 115図	S A 141実測図	122	
第 8 2 図	S A 125遺物実測図 3	97	第 116図	S A 141遺物実測図	122	
第 8 3 図	S A 125土器出土状況	99	100	第 117図	S A 142	123
第 8 4 図	S A 126実測図	101	第 118図	S A 142遺物実測図	124	
第 8 5 図	S A 126遺物実測図	102	第 119図	S A 143実測図	124	
第 8 6 図	S A 127実測図	102	第 120図	S A 143遺物実測図	124	
第 8 7 図	S A 127遺物実測図	102	第 121図	S A 144実測図	125	
第 8 8 図	S A 128実測図	103	第 122図	S A 144遺物実測図	125	
第 8 9 図	S A 128遺物実測図	103	第 123図	S A 145実測図	125	
第 9 0 図	S A 128遺物検出状況	104	第 124図	S A 145遺物実測図	126	
第 9 1 図	S A 129実測図	106	第 125図	S A 146実測図	127	
第 9 2 図	S A 129遺物実測図	106	第 126図	S A 146遺物実測図	128	
第 9 3 図	S A 130実測図	107	第 127図	S A 146遺物出土状況	129	
第 9 4 図	S A 131実測図	107	第 128図	S A 147実測図	131	
第 9 5 図	S A 131遺物実測図	107	第 129図	S A 147遺物実測図	131	
第 9 6 図	S A 132実測図	108	第 130図	S A 148実測図	132	
第 9 7 図	S A 132遺物実測図 1	109	第 131図	S A 148遺物実測図	132	
第 9 8 図	S A 132遺物実測図 2	110	第 132図	S A 149実測図	132	
第 9 9 図	S A 133実測図	111	第 133図	S A 149遺物実測図	132	
第 100図	S A 133遺物実測図	111	第 134図	S A 150実測図	133	
第 101図	S A 133実測図	112	第 135図	S A 150遺物実測図	133	
第 102図	S A 134遺物実測図	112	第 136図	S A 151実測図	133	

第 137图	S A 152実測図	134	第 171图	S A 1 遺物実測図	158
第 138图	S A 152遺物実測図	134	第 172图	S A 2 実測図	159
第 139图	S B 1 実測図	135	第 173图	S A 2 遺物実測図	159
第 140图	S B 2 実測図	136	第 174图	S A 3 実測図	160
第 141图	S B 3 実測図	136	第 175图	S A 3 遺物実測図	160
第 142图	S B 4 実測図	137	第 176图	S A 4 実測図	161
第 143图	S C 1・2・3 実測図	138	第 177图	S A 4 遺物実測図 1	161
第 144图	S C 4 実測図	139	第 178图	S A 4 遺物実測図 2	162
第 145图	S C 5 実測図	139	第 179图	S A 5 実測図	163
第 146图	S C 6 実測図	140	第 180图	S A 5 遺物実測図	164
第 147图	S C 7 実測図	141	第 181图	S A 6 実測図	164
第 148图	S C 7 S H 3 実測図	142	第 182图	S A 6 遺物実測図	165
第 149图	S C 8 実測図	143	第 183图	S A 7 実測図	165
第 150图	S C 9 実測図	145	第 184图	S A 7 遺物実測図	166
第 151图	S C 10 実測図	146	第 185图	S A 8 実測図	167
第 152图	S C 11 実測図	147	第 186图	S A 8 遺物実測図	167
第 153图	S C 12 実測図	148	第 187图	S A 9 実測図	167
第 154图	S C 13 実測図	148	第 188图	S A 10 実測図	168
第 155图	S J 11 周辺遺構分布図	149	第 189图	S A 10 遺物実測図	168
第 156图	S J 11 人骨検出状況実測図	149	第 190图	S A 11 実測図	168
第 157图	S K 104	152	第 191图	S A 11 遺物実測図	169
第 158图	S K 107	152	第 192图	S A 12 実測図	169
第 159图	S K 105	152	第 193图	S A 12 遺物実測図	170
第 160图	S K 109	152	第 194图	S A 13 実測図	170
第 161图	S K 114	153	第 195图	S A 13 遺物実測図	171
第 162图	S K 115	153	第 196图	S A 14 実測図	171
第 163图	S K 131	153	第 197图	S A 14 遺物実測図	172
第 164图	S K 122	153	第 198图	S A 15 実測図	172
第 165图	S K 132	154	第 199图	S A 15 遺物実測図	172
第 166图	S K 133	154	第 200图	S A 16 実測図	173
第 167图	S K 136	154	第 201图	S A 16 遺物実測図	173
第 168图	土坑出土遺物実測図 1	155	第 202图	S A 17 実測図	173
第 169图	土坑出土遺物実測図 2	156	第 203图	S A 17 遺物実測図	174
第 170图	S A 1 実測図	157	第 204图	S A 18 実測図	175

第 205図	S A 18遺物実測図	176	第 239図	S A 34遺物実測図	192
第 206図	S A 19遺物実測図	176	第 240図	S A 35実測図	193
第 207図	S A 19実測図	176	第 241図	S A 35遺物実測図	194
第 208図	S A 20実測図	177	第 242図	S A 36実測図	194
第 209図	S A 20遺物実測図	177	第 243図	S A 36遺物実測図	194
第 210図	S A 21実測図	177	第 244図	S J 1実測図	195
第 211図	S A 21遺物実測図	177	第 245図	S J 2実測図	195
第 212図	S A 22実測図	178	第 246図	S J 3実測図	196
第 213図	S A 22遺物実測図	178	第 247図	S J 3遺物実測図	198
第 214図	S A 23実測図	178	第 248図	S J 3下層実測図	198
第 215図	S A 23遺物実測図	179	第 249図	S J 4実測図	199
第 216図	S A 24実測図	179	第 250図	S J 5実測図	200
第 217図	S A 24遺物実測図	179	第 251図	S J 6実測図	200
第 218図	S A 25実測図	180	第 252図	S J 7・S J 8 実測図	201
第 219図	S A 25遺物実測図	180	第 253図	S J 9実測図	203
第 220図	S A 26実測図	181	第 254図	S J 10実測図	203
第 221図	S A 26遺物実測図	181	第 255図	S Q 1～10遺構分布図	204
第 222図	S A 27実測図	182	第 256図	S Q 1実測図	205
第 223図	S A 28実測図	182	第 257図	S Q 1遺物実測図	205
第 224図	S A 28礫検出状況実測図	183	第 258図	S Q 2実測図	206
第 225図	S A 28遺物実測図	183	第 259図	S Q 3実測図	206
第 226図	S A 29実測図	184	第 260図	S Q 4実測図	207
第 227図	S A 29遺物実測図	184	第 261図	S Q 4遺物実測図	207
第 228図	S A 30実測図	184	第 262図	S Q 5・6・7 実測図	208
第 229図	S A 30遺物実測図	185	第 263図	S Q 5・6 遺物実測図	208
第 230図	S A 31実測図	185	第 264図	S Q 8実測図	209
第 231図	S A 31遺物出土状況	186	第 265図	S Q 9・10実測図	210
第 232図	同カマド検出状況	186	第 266図	S Q 9遺物実測図	210
第 233図	S A 31遺物実測図	189	第 267図	S Q 10遺物実測図	210
第 234図	S A 32実測図	190	第 268図	S H 1実測図	211
第 235図	S A 32遺物実測図	191	第 269図	D区 S D 15遺物集中区実測図	213
第 236図	S A 33実測図	191	第 270図	S D 15遺物実測図 1	213
第 237図	S A 33遺物実測図	191	第 271図	S D 15遺物実測図 2	214
第 238図	S A 34実測図	192	第 272図	S D 1遺物実測図 1	217

第 273図	S D 1 遺物実測図 2	218	第 290図	扁平片刃石斧 2 実測図	250
第 274図	S D 2 遺物実測図 1	220	第 291図	扁平片刃石斧磨製石錐	
第 275図	S D 2 遺物実測図 2	221		磨製石剣実測図	251
第 276図	柱穴平面刑模式図と竪穴住居	225	第 292図	大型蛤刃石斧 1 実測図	252
第 277図	S J 11埋葬情愛想像図	228	第 293図	大型蛤刃石斧 2 実測図	253
第 278図	松原遺跡出土土器形態分類図	231	第 294図	磨製石庖丁実測図	255
第 279図	弥生時代中期土器編年案	233	第 295図	磨製石庖丁・石槌実測図	256
第 280図	ミニチュア土器及び円盤状 土製品実測図	235	第 296図	その他石製品実測図	257
第 281図	打製石鏃実測図	237	第 297図	管玉・白玉模造品実測図	258
第 282図	打製石錐・楔形石器実測図	239	第 298図	石皿実測図	259
第 283図	スクレイパー・擦り切り石器 ・RF実測図	241	第 299図	松原遺跡集落範囲想像図	283
第 284図	RF・UF実測図	242	第 300図	S J 2 想像図	284
第 285図	RF・UF実測図	243	第 301図	S J 3 想像図	285
第 286図	石核・敲石・凹石実測図	244	第 302図	S J 4 想像図	286
第 287図	磨製石鏃未製品実測図	246	第 303図	S J 6 想像図	287
第 288図	磨製石鏃実測図	247	第 304図	S J 7 想像図	288
第 289図	扁平片刃石斧 1 実測図	249	第 305図	S J 8 想像図	289
			第 306図	S J 9 想像図	290

写 真 目 次

写真1	調査地点遠景	1	写真35	I区2次面 北から	45
写真2	A区重機表土剥ぎ	2	写真36	I区3次面 北から	45
写真3	B区3次面へ掘下げ	2	写真37	I区2次面 北から	45
写真4	B区3次面遺構掘下げ	2	写真38	I区3次面 北から	45
写真5	C区1次面S J 3掘下げ	2	写真39	J区 北から	46
写真6	西沢先生の現地指導 S J 7	3	写真40	J区 北から	46
写真7	D区1次面遺構検出	3	写真41	J区 南から	46
写真8	E区2次面SD 14 16掘下げ	3	写真42	J区礫層検出状況	46
写真9	I区3次面掘下げ	3	写真43	J区礫層近景	46
写真10	N区1次面掘下げ	4	写真44	J区2次面 南から	47
写真11	平成2年度調査参加者	4	写真45	K区2次面 南から	47
写真12	平成3年度調査参加者	4	写真46	K区3次面 南から	47
写真13	平成4年度調査参加者	4	写真47	K区2次面 南から	47
写真14	松原遺跡航空写真	6	写真48	K区3次面 南から	48
写真15	A・B区1・2次面 北から	38	写真49	L区2次面 北から	48
写真16	C区2次面 北から	38	写真50	L区3次面 北から	48
写真17	D区1次面 南から	39	写真51	M区2次面 南から	48
写真18	E区1次面 南から	39	写真52	M区3次面 南から	49
写真19	D区2次面 北から	40	写真53	N区2次面 北から	49
写真20	E区2次面 北から	40	写真54	N区3次面 北から	49
写真21	A・B区3次面 北から	41	写真55	N区2次面、畦畔状遺構	49
写真22	C区3次面 北から	41	写真56	J区礫層検出状況	50
写真23	D区3次面 北から	42	写真57	J区礫層検出状況	50
写真24	E区3次面 北から	42	写真58	J区礫層検出状況	50
写真25	F区2次面 北から	43	写真59	J区礫層検出状況	50
写真26	F区2次面 南から	43	写真60	SA 101遺物写真	53
写真27	G区2次面 北から	43	写真61	SA 101	53
写真28	G区2次面 南から	44	写真62	SA 102	54
写真29	H区2次面 南から	44	写真63	SA 102	56
写真30	H区3次面 南から	44	写真64	SA 104	58
写真31	I区2次面 南から	44	写真65	SA 105	59
写真32	I区3次面 北から	44	写真66	SA 106遺物検出状況	60
写真33	I区全景	45	写真67	SA 118遺物写真	62
写真34	I区3次面 南から	45	写真68	SA 107	63

写真 6 9	S A 108	65	写真 103	S A 128遺物検出状況	105
写真 7 0	S A 108Pit内葬理置検出状況	65	写真 104	S A 128遺物検出状況	105
写真 7 1	S A 108Pit内葬理置検出状況	65	写真 105	S A 129	106
写真 7 2	S A 108遺物写真	65	写真 106	S A 131	107
写真 7 3	S A 110付近	68	写真 107	S A 132	108
写真 7 4	S A 111	69	写真 108	S A 132遺物写真	110
写真 7 5	鹿角出土状況	69	写真 109	S A 133遺物写真	111
写真 7 6	S A 112	70	写真 110	S A 134遺物写真	112
写真 7 7	S A 113 C 区	71	写真 111	S A 135	113
写真 7 8	S A 113 B 区	71	写真 112	S A 137炉検出状況	114
写真 7 9	S A 113遺物写真	72	写真 113	S A 137	114
写真 8 0	S A 114	73	写真 114	S A 138	116
写真 8 1	S A 114遺物検出状況	75	写真 115	S A 139	117
写真 8 2	S A 114遺物写真	76	写真 116		118
写真 8 3	S A 115	77	写真 117	検出状況	118
写真 8 4	S A 116	78	写真 118	立割り状況	118
写真 8 5	S A 117	79	写真 119	完掘状況	118
写真 8 6	S A 117遺物検出状況	81	写真 120	掘り方完掘状況	118
写真 8 7	S A 117遺物写真	82	写真 121		119
写真 8 8	S A 118	83	写真 122	遺物出土状況	120
写真 8 9	S A 118遺物写真	85	写真 123	S A 140	120
写真 9 0	S A 119	86	写真 124		121
写真 9 1	S A 120炉検出状況	87	写真 125	S A 141	122
写真 9 2	S A 120	87	写真 126	S A 142	123
写真 9 3	S A 120遺物写真	89	写真 127	S A 143	124
写真 9 4	S A 122	90	写真 128	S A 144	125
写真 9 5	S A 122遺物写真	92	写真 129	S A 145	126
写真 9 6	S A 124	93	写真 130	S A 145遺物写真	126
写真 9 7	S A 125	94	写真 131	S A 146	127
写真 9 8	S A 125遺物出土状況	97	写真 132	S A 146遺物出土状況	129
写真 9 9	S A 125遺物写真	98	写真 133	S A 146遺物出土状況	129
写真 100	S A 126	101	写真 134	S A 146遺物写真	130
写真 101	S A 128	103	写真 135	S A 147	131
写真 102	S A 128遺物検出状況	104	写真 136	S A 148	132

写真 137	S A 149	132	写真 171	S A 1 遺物写真 1	158
写真 138	S A 150	133	写真 172	S A 1 遺物写真 2	159
写真 139	S A 151	133	写真 173	S A 2 遺物写真	160
写真 140	S A 152	134	写真 174	S A 3	160
写真 141	H地区 遺物分布状況	134	写真 175	S A 3 カマド近景	160
写真 142	S B 1	135	写真 176	S A 4 カマド近景	161
写真 143	S B 1	135	写真 177	S A 4	161
写真 144	S B 2 - 4	135	写真 178	S A 4 遺物写真	162
写真 145	S B 2・3	135	写真 179	S A 5	163
写真 146	S B 4	137	写真 180	S A 5 カマド近景	163
写真 147	B区 S C 群全景	140	写真 181	S A 5 遺物出土状況	163
写真 148	S C 7	141	写真 182	S A 5 遺物写真	164
写真 149	S H 3	142	写真 183	S A 6	164
写真 150	E区 S C 群全景	143	写真 184	S A 6 カマド近景	165
写真 151	S C 8	144	写真 185	S A 6 遺物写真	165
写真 152	S C 8・9	144	写真 186	S A 7	165
写真 153	S C 9	144	写真 187	S A 7 遺物写真	166
写真 154	S C 9	146	写真 188	S A 8	167
写真 155	S C 10	147	写真 189	S A 9	167
写真 156	E区 3次面全景 北から	147	写真 190	S A 10	168
写真 157	S J 11全景	149	写真 191	S A 10 遺物写真	168
写真 158	S J 11近景	149	写真 192	S A 11	168
写真 159	S J 11近景	150	写真 193	S A 12	169
写真 160	S J 11近景	150	写真 194	S A 12 遺物写真	169
写真 161	S J 11 遺物写真	150	写真 195	S A 13	170
写真 162	S J 11 石礎出土状況	150	写真 196	S A 13 遺物写真	170
写真 163	S J 11 石礎出土状況	150	写真 197	S A 13 遺物写真	171
写真 164	S K 107	156	写真 198	S A 14	171
写真 165	S K 107 石庖丁出土状況	156	写真 199	S A 14 遺物写真	172
写真 166	S K 136	156	写真 200	S A 15	172
写真 167	S K 136 遺物出土状況	156	写真 201	S A 16	173
写真 168	S A 1	157	写真 202	S A 17	173
写真 169	S A 1 土器出土状況	157	写真 203	S A 17 遺物写真	173
写真 170	S A 1 カマド近景	157	写真 204	S A 17 遺物写真	174

写真 205	S A 17遺物写真	175	写真 238	S A 36	194
写真 206	S A 18遺物写真	175	写真 239	S J 1	195
写真 207	S A 18	175	写真 240	S J 2	195
写真 208	S A 19	176	写真 241	S J 2人骨検出状況	196
写真 209	S A 21	177	写真 242	S J 2人骨検出状況	196
写真 210	S A 22	178	写真 243	S J 3	196
写真 211	S A 22遺物写真	178	写真 244	S J 3人骨検出状況	197
写真 212	S A 23	179	写真 245	S J 3下層土器群出土状況	198
写真 213	S A 24	179	写真 246	S J 3遺物写真	198
写真 214	S A 24遺物写真	179	写真 247	S J 4人骨検出状況	199
写真 215	S A 25	180	写真 248	S J 4人骨検出状況	199
写真 216	S A 25遺物写真	181	写真 249	S J 4人骨検出状況	199
写真 217	S A 26	181	写真 250	S J 5	200
写真 218	S A 27 28全景	182	写真 251	S J 6全景	200
写真 219	S A 27	182	写真 252	S J 6人骨検出状況	200
写真 220	S A 28	182	写真 253	S J 6人骨検出状況	200
写真 221	S A 28遺物写真	183	写真 254	S J 7・S J 8	201
写真 222	S A 29	184	写真 255	S J 7	201
写真 223	S A 30遺物写真	184	写真 256	S J 8	201
写真 224	S A 30	185	写真 257	S J 7・8	202
写真 225	S A 30遺物出土状況	186	写真 258	S J 7人骨検出状況	202
写真 226	S A 31カマド近景 および遺物出土状況		写真 259	S J 7人骨検出状況	202
写真 227	S A 31全景	187	写真 260	S J 8人骨検出状況	202
写真 228	S A 31カマド全景	187	写真 261	S J 8人骨検出状況	202
写真 229	S A 31完掘全景	188	写真 262	S J 9全景	202
写真 230	S A 31遺物写真	188	写真 263	S J 9人骨検出状況	203
写真 231	S A 32	190	写真 264	S J 9人骨検出状況	203
写真 232	S A 33遺物出土状況	190	写真 265	S J 10人骨検出状況	203
写真 233	S A 33	191	写真 266	S J 10人骨検出状況	203
写真 234	S A 34カマド遺物出土状況	192	写真 267	S Q群全景	204
写真 235	S A 34	192	写真 268	S Q群全景	204
写真 236	S A 34遺物写真	193	写真 269	S Q 1	205
写真 237	S A 35	193	写真 270	S Q 1 南から	205
		193	写真 271	S Q 2	206

写真 272	S Q 3	206	写真 295	石核・敲石・凹石写真	264
写真 273	S Q 4	207	写真 296	磨製石鏃写真	265
写真 274	S Q 5・6・7	208	写真 297	磨製石鏃未製品写真	265
写真 275	S Q 8	209	写真 298	扁平片刃石斧写真 1	266
写真 276	S Q 9・10	209	写真 299	扁平片刃石斧写真 2	266
写真 277	S H 1	211	写真 300	磨製石剣・磨製石鏃写真	267
写真 278	E区2次面S D 14・16北から	212	写真 301	大型蛤刃石斧写真	267
写真 279	E区2次面S D 14・16南から	212	写真 302	石包丁写真	268
写真 280	D区2 S D 15遺物集中区	212	写真 303	石槌写真	268
写真 281	D区2 S D 15遺物出土状況	213	写真 304	砥石等石製品写真	269
写真 282	S D 15遺物写真	215	写真 305	管玉等石製品写真	269
写真 283	C区全景 南から	216	写真 306	S J 1	284
写真 284	S D 1	216	写真 307	S J 2	284
写真 285	S D 2	216	写真 308	S J 3	285
写真 286	S D 1遺物写真	219	写真 309	S J 4	286
写真 287	S D 2遺物写真	222	写真 310	S J 6	287
写真 288	S J 11	227	写真 311	S J 7	288
写真 289	S J 11全景	228	写真 312	S J 8	289
写真 290	石鏃出土状況	228	写真 313	S J 9	290
写真 291	打製石鏃写真	262	写真 314	S J 11	290
写真 292	打製石鏃・楔形石器写真	263	写真 315	人骨検出風景	291
写真 293	U F・R F等写真	263	写真 316	松原遺跡出土人骨	292
写真 294	R F 42拡大写真	264			

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経過

松原遺跡の所在する長野市松代町東寺尾地籍は、昭和53年に刊行された『更級地料地方誌』に弥生時代中期以降の複合遺跡として紹介されているのみで、正式な発掘調査は実施されていなかった。しかしながら高速道路「上信越自動車道」建設事業を契機として、平成元年度より各種関連事業による土木工事が活性化し、埋蔵文化財記録保存を目的とした緊急発掘調査が実施されるようになってきた。高速道本線部分は、長野県教育委員会主導の下、平成元年度より財団法人長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査が継続実施された。また平成2年度には南長野農業協同組合集出荷場施設建設事業、平成3年度には市道松代東111号線道路改良事業、平成4年度から市道松代東63号線道路改良事業の各事業ともない当教育委員会が発掘調査を実施している。このような情勢の中で、高速道関連事業として長野県長野建設事務所による「主要地方道中野更級線道路改良事業」が浮上し、長野建設事務所・長野県教育委員会・長野市教育委員会の3者による協議の結果、長野県教育委員会の指導により長野市教育委員会が記録保存を目的とした発掘調査を担当することとなった。発掘調査は、工事の施工予定に合せ新設部分より始め、平成2年度は蛭川橋に接続する工区(調査区名：A～C区)、平成3年度は現道へ接続する工区と拡幅の一部(D～G区)、平成4年度は現道拡幅の工区(H～N区)について実施した。現場における作業は平成2年7月27日に開始し、中断を含みながら平成4年10月14日に終了した。



写真1 調査地点遠景(中央道路部分がA～E区、手前は建設途上の高速道)

第2節 調査日誌抄

【平成2年度】

- 7月27日～ 重機による表土剥ぎ作業開始（8月1日まで）
7月30日 機材搬入、プレハブ、トイレ等設置
8月2日～ A区・B区共に遺構検出作業開始
8月27・28日 B区コーディックシステム（CS）測量
8月30日～ A区全景写真撮影。重機によるB区3次面検出
10月11・12日 B区3次面CS測量2回目
10月13日 A区S J 10獸骨の取上げ
10月21日 更北郷土史研究会による現場見学会
10月22日 A区重機による土層確認トレンチ掘下げ
10月23日～ 廃土移動作業（31日まで）
10月30日～ 重機によるC区表土剥ぎ開始（11月5日まで）
11月9・13日 C区CS測量4回目
11月21日 C区CS測量5回目
11月29日 C区2次面全景写真撮影。CS測量6回目
12月3日 西沢先生現地指導。S J 2～4人骨取上げ
12月4日～ 重機によるC区3次面の検出。（5日まで）
12月5日～ SA112～139等遺構検出作業。写真撮影
12月19日 CS測量7回目
1月9日 遺構検出、写真撮影。CS測量8回目
1月18日 機材撤収。平成2年度の現場作業を終了する

【平成3年度】

- 4月18日～ 重機による表土剥ぎ作業開始
4月22日～ 機材搬入、テント設置。遺構検出作業開始
4月24日～ SA1～3、S J 6～8等遺構検出作業
5月10日 コーディックシステム（CS）測量9回目
5月11日 D区1次面調査終了。重機による2次面検出
5月13日 西沢先生現地指導2回目。（S J 6～8）SQ 1～10、SD13～16等遺構検出作業
5月18日 D区2次面全景写真撮影。CS測量10回目
5月21日～ 重機によるD区3次面の検出
5月27日～ SA140・148、SC7、S J 11等遺構検出
6月5日 CS測量11回目。S J 11検出作業
6月7日 各紙新聞記者によるS J 11人骨に関する取材
6月10日 西沢先生現地指導3回目。S J 11人骨の取上げ



写真2 A区重機表土剥ぎ



写真3 B区3次面へ掘下げ



写真4 B区3次面遺構掘下げ



写真5 C区1次面S J 3掘下げ

- 6月11日 CS測量12回目。D区における調査終了
 6月12日～ 平面図結線。廃土移動作業開始
 6月24日～ 重機によるE区の表土剥ぎ作業開始
 6月28日～ SA4～7、SJ9等遺構検出作業
 7月17日 西沢先生現地指導4回目。CS測量13回目
 7月19日～ 重機によるE区2次面の検出(26日まで)
 8月23日 E区2次面全景写真撮影。CS測量14回目
 8月27日～ 重機によるE区3次面の検出作業
 9月3日～ SA143・146、SC8・9等遺構検出作業
 9月17・18日 CS測量15回目。
 9月24日～ SB2～4等遺構検出作業
 9月28日 台風19号によりプレハブハウス倒壊
 10月9日 CS測量16回目
 10月28日～ 重機によるF区の表土剥ぎ作業開始
 11月1日～ SA25・26等遺構検出作業。写真撮影
 11月8日 F区2次面全景写真撮影。CS測量17回目
 11月12日～ 人力によるF区3次面へのトライアル掘下げ
 11月18日 F区3次面全景写真撮影。CS測量18回目
 重機によるG区の表土剥ぎ作業開始
 11月21日～ SA27～30等遺構検出作業。写真撮影
 11月26日 G区2次面全景写真撮影。CS測量19回目
 11月29日～ 人力によるG区3次面へのトライアル掘下げ
 12月4日 G区3次面全景写真撮影。CS測量20回目
 12月5日 機材撤去。平成3年度の現場作業を終了する

〔平成4年度〕

- 6月5日～ 北側(N区)より重機による表土剥ぎ作業開始
 6月16日～ L・M・N区遺構検出作業
 6月19日～ M区 SA34・35等遺構検出作業
 6月20日 N区2次面CS測量21回目
 7月2日 J区重機による表土剥ぎ作業
 7月4日 M区2次面CS測量22回目
 7月8日 L・M・N区CS測量23回目
 7月22日 K₁～K₂CS測量24回目。J₁区SA31検出
 7月27日 J₂・J₃区人力による3次面への掘下げ
 7月29日～ J₁区重機による表土剥ぎ作業
 8月3日～ K₁区重機による3次面の検出
 8月7日 M・K・J区CS測量25回目



写真6 西沢先生の現地指導(SJ7)



写真7 D区1次面遺構検出



写真8 E区2次面SD14～16掘下げ



写真9 J区3次面掘下げ

- 9月2日 L・J区CS測量26回目
 9月11・12日 I₁区CS測量27回目。H区2次面全景撮影
 9月24日 H区重機による表土剥ぎ作業
 9月25日 I₁～I₄CS測量28回目
 10月6日 H区2次面全景写真撮影。CS測量29回目
 10月7日 平面図結線。H区3次面確認トライアル掘下げ
 10月9日 現場内中間報告会。機材の撤去作業
 10月12日 長野市政記者クラブによる現場見学会
 10月14日 プレハブ、機材の撤去作業。全調査区における
 全ての調査および現場作業を完了する。

(山崎佐織)



写真10 N区1次面掘下げ

写真11 平成2年度調査参加者



写真12 平成3年度調査参加者



写真13 平成4年度調査参加者



第3節 調査体制

本調査は長野市教育委員会(長野市埋蔵文化財センター)の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄
調査機関 長野市埋蔵文化財センター 所長 水沢国男(平成2年度)
所長 小山正(平成3年度～)
主幹兼 小山正(平成2年度)
所長補佐 山中武徳(平成3年度～)

庶務係

係長 小山正(～平成2年度) 係長 山中武徳(平成3年度～)

事務員 青木厚子

調査係

係長	矢口忠良(調査担当者)	専門員	中殿章子
主査	青木和明	専門員	横山かよ子
主事	千野浩	専門員	森泉かよ子(平成3年度)
主事	飯島哲也(現場責任者)	専門員	笠井敦子(平成4年度～)
専門主事	小松安和	専門員	山崎佐織(平成4年度)
専門主事	大室昂(～平成2年度)	専門員	山田美弥子(平成4年度～)
専門主事	中沢克三(～平成2年度)	専門員	寺島孝典(平成4年度～)
専門主事	羽場卓雄(平成3年度～)	職員	今井悦子(～平成2年度)
専門主事	太田重成(平成3年度～)		

執筆参加者 和田博(長野市立博物館専門員)
西沢寿晃(信州大学医学部第2解剖学教室)
久保勝正(三重県立富宮歴史博物館学芸員)
久保邦江(奈良市埋蔵文化財調査センター技術吏員)

調査員 矢口栄子、寺島孝典(～平成3年度)、青木善子

発掘参加者 相沢福志子、青木つや子、青木幸子、石坂和明、石田利明、石田千絵、今井和夫、上田清、上田富子、上村久人、片桐みつ子、菊井久夫、北沢秀子、小林利男、酒井国衛、地代所洋子、烏津一栄、烏田みつえ、清水春子、杉田せつ子、鈴木美智子、岡崎文子、多城恵子、立田淳子、玉井秀樹、塚田道三、常田千代江、中沢順子、中沢正明、西川一郎、橋爪孝次、深沢要作、松田とく江、丸山清、丸山トキ子、宮崎さちき、宮下豊、宮下るい子、村松正子、山口敏子、山下雄三、横田文雄、吉野なを枝、吉田孝

整理参加者 池田見紀、岡沢治子、小泉ひろ美、地代所洋子、烏津一栄、田村直也、千葉博俊、常田千代江、徳成奈於子、西尾千枝、向山純子、松田とく江、武藤信子

遺構測量委託 有限会社写真測図研究所 代表取締役 杉本幸治 (〒380 長野市鶴賀678)

協力者 宮崎徳男、桑名宏美、長野建設事務所藤池技師・廣野技師・永田技師、北信土建藤木下茂、西沢真、萩原久登、野沢敏、新協建設㈱宮林睦典

第II章 松原遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

岩鼻の狭隘を破り坂城広谷を北流した千曲川は、更埴市で長野盆地に流入し流路を東北に転じ、やがて立ヶ花を盆地からの流出口とし、島崎藤村も舟下りした先行性峡谷を飯山盆地へ向う。

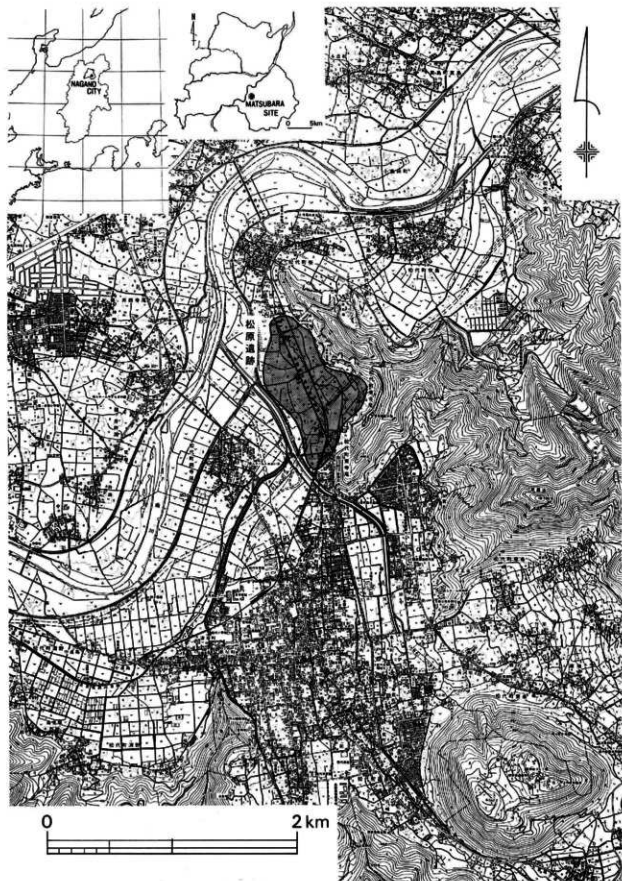
一方、中新世中期以降の比較的新しく脆弱な堆積が主体である西部山地を集水貫流した犀川は、犀口を谷口として東南流する幾条もの支流を分岐し、おびただしい流土を盆地に搬入埋立て、裾花・浅川等と相俟って広い沖積盆を構成して千曲川を盆地東端の河東山地裾に押しやっている。

そのため、千曲川の盆地流入・流出両地点間の直距離約25kmに対して高度差は僅か20mに過ぎず、流路攻撃面には河食崖をつくり堆積面には自然堤防を形成し、その名のとおり山脚を縫って蛇行し、緩やかな水脈を引いて「中麻奈尔」の万葉古歌を想起させたゆとう。その情景を相馬御風は次のように詠じている。

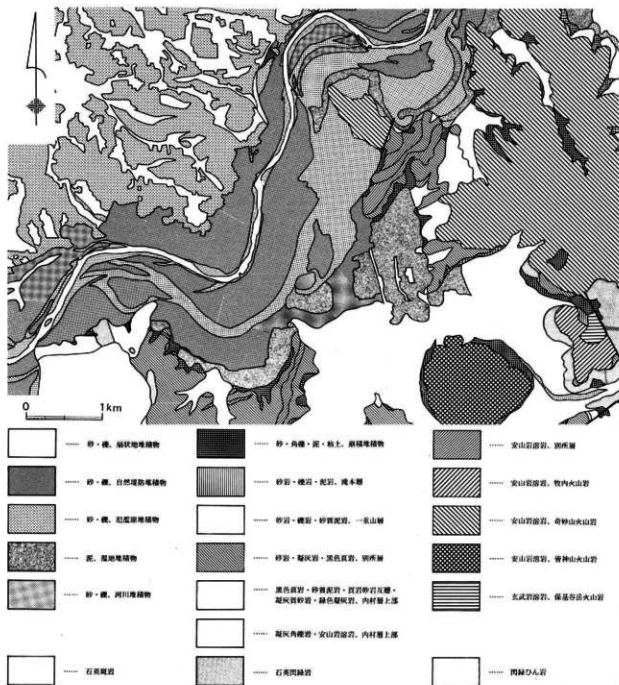
ゆく水のすえ遠々しみすずかる信濃たかはら（高原）秋深みかも



写真14 松原遺跡航空写真（平成2年、夏撮影）



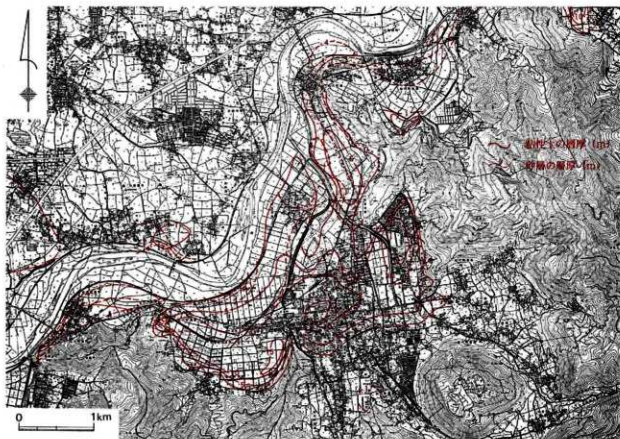
第1図 松原遺跡周辺地形図 (S = 1 : 30,000)



第2図 松原遺跡周辺表層地質図 (S=1:50,000)

松代附近の河東山地はフォッサマグナ活動で生成された火成岩類はじめ、時期の異なる火山岩類が清野層(別所同位層)の泥岩類中に岩脈となり、それを脊梁とした山稜が数条半島状に盆地へ突出し、山稜間は湾入部となり出入の多い複雑な山麓線の組み合わせは、リアス式海岸線に似通う。

1742年(寛保2)戊の満水で松代城内も浸水した苦い経験から、1752年(宝暦2)に城郭から約1km遠避け蛇行を少くして開削した現流路に比し、旧流路は城下を洗い象山離山・愛宕山(寺尾城山先端)によって松代盆地から分離された清野や松原湾入部は崖雖も侵食され、その左岸には自然堤防を発達させている。



第3図 松原遺跡周辺地盤図 (S = 1 : 50,000)

湾入部への蛇行は、流下速度の旺盛な岸川支流の影響が大きく、小森へ流入する古岸川・1561年(永祿4)9月10日の弘暎戦で上杉武田両勢が流れをはさんで戦闘態勢を兩岸にとったとみられる杵淵附近流下の支流や小島田・真島界の支流等がそれぞれ清野・松原・牧島への流入堆積を助長している。

旧流路は自然堤防の堆積によって後背湿地となり、清野・大室では水田や一部に蓮田が経営され、牧島では近年に至って畑への転換が多くなっている。しかし松原では地表がやや低いのみで北端に化石湖金井池を残す。

この地域では牧島・柳島・猫島・道島等島のつく地名が多く、そこには四ツ屋遺跡をはじめ、古来からの人々の生活の息吹きを明らかにし、道島・西寺尾・柴・釜屋・牧島・大室等の集落が現在成立している。

本調査地点はそんな松原自然堤防の一角に所在する。元来は寺尾自然堤防とも呼ばれて松代小学校や城跡附近から松原へかけての連続堆積面であるが、藤沢川を合流した蛭川が本遺跡南近隣で浸食崖をともなって解析してはいたものの、両河川はこの上流で天井川となり、中流一帯に湿地を展開する。温泉団地が造成されてからもしばしば浸水に悩まされて以来、揚水機場のほか川筋も改修され以前の数倍も深く掘削された。

松原自然堤防上は桑園や長芋栽培が行われ、近年リンゴや巨峰の果樹園も増加している。両端の柴や東寺尾からの住宅地進出はほとんどみられないが、高速道及びIC設置は今後急速な変貌をもたらすと予想される。

(和田 博)

引用・参考文献

『長野市防災基本図』『長野市表層地質図』『長野地域の地質』
角川日本地名大辞典編纂委員会 1990 『角川日本地名大辞典』第20巻



第4図 松原遺跡周辺コンタ図 (S = 1 : 10,000)

第2節 歴史的環境

(1) 考古学的環境

松原遺跡周辺は、縄文時代からの注目すべき遺跡・遺構が数多く確認されている。以下、時代ごと、そして松原遺跡のある松代沖積面、松代扇状地、更に川中島扇状地の3つの地域に分け概観したい。

縄文時代 千曲川自然堤防上に位置する四ツ屋遺跡(12)や、中村遺跡(17)などで確認されている。中条遺跡(18)では縄文時代晩期の最終末期に属する石刀が出土しており、また村東山手遺跡(3)出土の縄文時代草創期の、口縁下に「ハ」字形爪形文が施された土器片は、善光寺平では初の出土とされている。その他には、平成元～2年度の(財)長野県埋蔵文化財センター(以下県埋文)による上信越自動車道部分の松原遺跡(以下松原高速道地点)発掘調査での、中世井戸跡断ち割り調査の際に、縄文時代前期末から後期前半までの遺構面が確認されている。

弥生時代 千曲川自然堤防上に大規模な集落が展開しはじめる。この自然堤防上に位置する四ツ屋遺跡では、弥生時代後期の土器がまとめて確認されている。また、松原高速道地点からは、これまで類例の少なかった磯床木棺墓が28基まとめて確認され、該期の埋葬形態を研究する上で重要な資料になるとと思われる。その他に、松原高速道地点と、平成2年度に実施した長野南農協集出荷場にあたる松原遺跡(以下松原農協地点)から、同じように弥生時代中期後半の環状溝跡が検出されており、北陸地方で検出される「環溝を有する建物」との関連性が指摘されている。特筆すべき遺物としては、松原高速道地点から出土した人面付土器がある。一般的には再葬墓に使用される人面付土器が、ここでは竪穴住居跡の覆土中から出土している点、稀有な出土例で興味深い。この他松原農協地点からは、同じく中期後半の住居跡床面から石支が出土している。出土した石支は東国でしか見られない有極短小形式であり、武器形祭器の性格としての存在理由が考えられるが、東国における性格変質を考慮に入れる必要があるだろう。松原高速道地点においても2点の石支が出土しているという。

千曲川自然堤防などを含む松代沖積面をめぐる展開と関連してみなければならぬ地域に川中島扇状地があるが、その広大な面積に対して確認されている遺跡はわずかである。その川中島扇状地に位置している田中沖遺跡(8)、現在は河川敷に入ってしまった花立遺跡(6)でも若干の遺物が採集されている。

北平1号墳(26)は弥生時代中期以来の棺の伝統を強く残した低墳丘墓で、弥生時代最終末か古墳時代初頭とされている。四ツ屋・松原・大室遺跡(2)を見下ろせる立地から、この周辺の社会環境を復元する上で貴重な墳墓である。

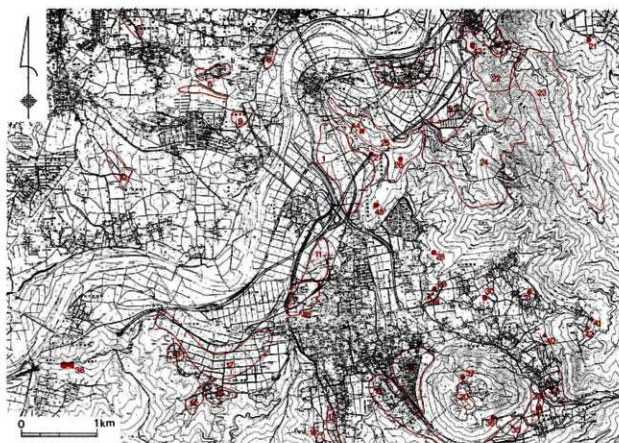
古墳時代 松原遺跡周辺でも多くの古墳が築造されるようになる。舞鶴山山頂には、前期古墳である径33mの円墳舞鶴山1号墳と、全長36.5mの前方後円墳舞鶴山2号墳を構築している。この古墳に続き、長礼山山頂に長礼山1・2号墳(28)が造られる。1号墳は径25mで竪穴式石室を有し、2号墳は径25mで組合式箱形石棺を主体部としており、いずれも円墳である。更に、径18mの円墳と径16mの円墳が並んでいる後期古墳の天王山古墳(29)がある。松代町を象徴する独立山塊である皆神山には、善光寺平を一望できる位置に、竪穴式石室と思われる径30mの円墳小丸山古墳(37)がある。後期になると中腹に横穴式石室を持つ径18mの円墳、南大平古墳(36)が構築される。また、皆神山周辺には善光寺平特有の合掌形石室を有する横石塚が点在する。その一つ皆間大塚古墳(31)は径34mで、北信地方の横石塚では最大のものである。この古墳には主体部の横穴式(?)石室の東上部に更に石室がある。この他、同じく竹原笹塚古墳(30)・桑根井空塚古墳(34)と、その周辺の小円墳で一つの墓域空間を形成している。その後更に墓域が拡大したものが山歌・宮崎古墳群(18)そして、牧内古墳群(32)・鎧塚古墳群(33)・村北古墳群(35)であるといえる。

以上松原周辺の古墳について見てきたが、屋地遺跡(19)は舞鶴山古墳・長礼山古墳・天王山古墳との関連を追求する上で、貴重な資料といえるのではないだろうか。この他、中村遺跡と舞鶴山古墳、中条遺跡前・中期集落

と舞鶴山古墳、後期集落と虫歌・宮崎古墳群との関係は、墓域と生活域といった生活様式を類推する上で今後の課題となるであろう。

松代の古墳といえば、横石塚で知られる大室古墳群を挙げなければならない。大室古墳群は総数500余基からなる5世紀中頃から8世紀に至る古墳群で、霞ヶ城支群(22)・大室谷支群(23)・北谷支群(24)・金井山支群(25)の4つの支群からなっており、その多くが横石塚である。横石塚という独特の築造形態は朝鮮半島鴨綠江流域、漢江流域他にも存在しているため、その系譜が論じられている。また善光寺平特有といえる合掌形石室は、韓国公州地方の柿木洞古墳群等にも存在しているため、百済系の影響を指摘されているが、直接的な系譜を論じるには現状ではいまだ資料不足といえる。これらを含め、継続的に調査を進めている明治大学の成果によって明らかとなるだろう。松原遺跡からも累壇文の調査により古墳が発見されている。この松原1号墳(27)は横穴式石室の円墳で、金環・銀環・勾玉・管玉・ガラス小玉・直刀・馬具(帶)・鉄鏃など多くの副葬品と、更に7体分もの人骨が確認されている。四ツ屋遺跡には古墳時代の特殊遺構が確認されている。円形周溝を持つこと、一部にのみ埴輪円筒列を残すなど、古墳縁辺部らしき様相を呈しており、古墳の可能性も指摘されている。

この時期の集落遺跡として、とくに大室古墳群との関連が考えられる遺跡として、北谷支群とは一等牧遺跡(5)、北谷支群・金井山支群成立とは川中島扇状地の田中沖遺跡の集落遺跡が挙げられる。



第5図 松原遺跡周辺遺跡分布図 (Scale = 1 : 50,000)

1 松原遺跡	7 田牧遺跡	13 宮村遺跡	虫歌・宮崎古墳群	24 大室古墳群北谷支群	30 竹原赤塚古墳	36 南大平古墳	42 池の平原跡
2 大室遺跡	8 田中沖遺跡	14 林正寺遺跡	19 扇地遺跡	25 大室古墳群金井山支群	31 曾根王塚古墳	37 小丸山古墳	43 霞城跡
3 村東山手遺跡	9 栗川原遺跡	15 大村遺跡	20 皆神山遺跡	26 北平1号墳	32 牧内古墳群	38 土口將軍塚古墳	44 金井山城跡
4 牧島遺跡	10 南宮遺跡	16 鹿島遺跡	21 大室山古墳群	27 松原1号墳	33 藤塚古墳群	39 天王山原跡	45 寺尾城跡
5 一等牧遺跡	11 松代城北遺跡	17 中村遺跡	22 大室古墳群霞ヶ城支群	28 長礼山1・2号墳	34 桑根井空塚古墳	40 牧内原跡	46 松代城跡
6 花立遺跡	12 四ツ屋遺跡	18 中条遺跡	23 大室古墳群大室谷支群	29 天王山古墳	35 村北古墳群	41 滝本原跡	

奈良・平安時代 当時、一般階級では持つことができなかつたと思われる遺物を出土する遺跡が目立つ。屋地遺跡では帯飾金具である銅製丸柄が、中条遺跡では緑釉陶器が松代扇状地で初めて出土している。川中島扇状地に位置する東川原遺跡(9)でも、住居跡に伴うものとは言いがたいが、緑釉陶器片と奈良三彩片が出土している。村北遺跡では獸脚付鼎形土製羽釜が2点、更に風字硯が出土している。この土製羽釜と同じものが川中島扇状地に位置する田中沖遺跡からも出土しており、その他には、馬具の鍔金具・八稜鏡なども確認されている。この獸脚付鼎形土製羽釜は、須恵質土器かあるいは鉄製類似品の模造であると思われるが、田中沖遺跡ではごく普遍的に検出される住居跡から出土しており問題点が残る。これらの遺跡は単なる集落遺跡というよりは、むしろ一般階級とは隔たりのある遺跡の可能性もある。また、松代は古くは中央支配を思わせる「美多(あがた)郷」と呼ばれていたこともあり、文献史的な面からも注目され、今後の考古学的成果に期待される。その他、松原農協地点で出土した土師器と須恵器の杯には底部に同じ刻印が施されており、土師器と須恵器を同じ工人(集団)が製作していた可能性があるという点で大変注目すべき資料である。松原高速道地点では仏具の鋳造関係資料が出土している。村東山手遺跡では奈良時代の石室状の施設を伴った墳墓が確認されており、当時の基制の一端を明らかにしたという点で注目される。また未調査で実態は明らかではないが窯業遺跡として天王山窯跡(39)・牧内窯跡(40)・滝本窯跡(41)・池の平窯跡(42)の古窯跡があり、生産背景や供給先など様々な問題を提起している。

中世以降 この辺りの山上に、霞城(43)・金井山城(44)・寺尾城(45)などの山城が築造されるようになる。北平1・2号塚は室町時代以降に構築されたと思われる中世の塚で、金井山城・寺尾城との関連が考えられている。また川中島合戦などで知られる海津城を前身とする松代城(46)は、史跡整備事業として昭和60年度から継続的に発掘調査が行なわれている。発掘調査成果より、平安時代までは大集落を形成した松原遺跡一帯が、中世になると集落が断絶することから、それが海津城築城、それに伴う城下町の形成とほぼ一致していることはあながち無関係とは言いきれないように思える。

このように松原遺跡周辺は、縄文時代から平安時代、そして今の松代町の原形を作ったとも言える松代城など、原始・古代から近世に至る良好な考古学的資料を埋蔵した環境にあると言えよう。

(山崎佐織)

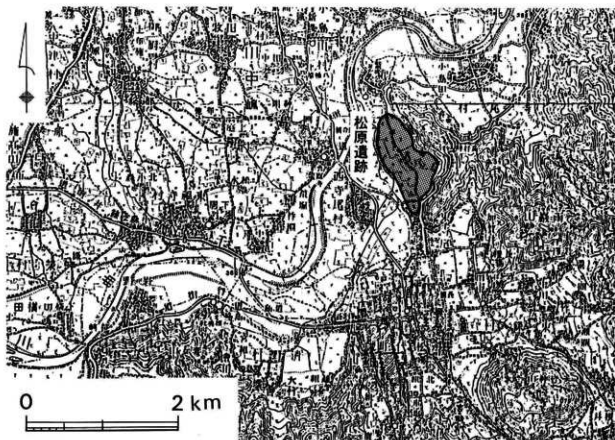
引用・参考文献

- 更級埴科地方誌刊行会 1978 『更級埴科地方誌』第2巻原古代中世編
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1989～1991 『長野県埋蔵文化財センター年報』6～8
 長野市教育委員会 1981 『長野・大室古墳群一分布調査報告書一』
 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会 1978 『中村遺跡』長野市の埋蔵文化財第3集
 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会 1980 『田中沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第7集
 長野市教育委員会 1991 『田中沖遺跡II』長野市の埋蔵文化財第42集
 長野県企業局・日本窯業史研究所 1977 『長野市松代 屋地遺跡』
 長野市教育委員会 1990 『屋地遺跡II』長野市の埋蔵文化財第36集
 長野市教育委員会 1989 『中条遺跡』長野市の埋蔵文化財第32集
 長野市教育委員会 1991 『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集
 長野市教育委員会 1989 『松代城跡』平成元年度発掘調査概報
 上田典男 1991 『長野市松原遺跡出土の人面付土器について』『長野県考古学会誌』63号 長野県考古学会
 飯島智也 1991 『長野市松原遺跡出土の石戈について』『長野県考古学会誌』63号 長野県考古学会
 長野県史刊行会 1982 『長野県史』主要遺跡編 東・北信
 松代町史復刻統町史刊行会 1972 『松代町史』上巻

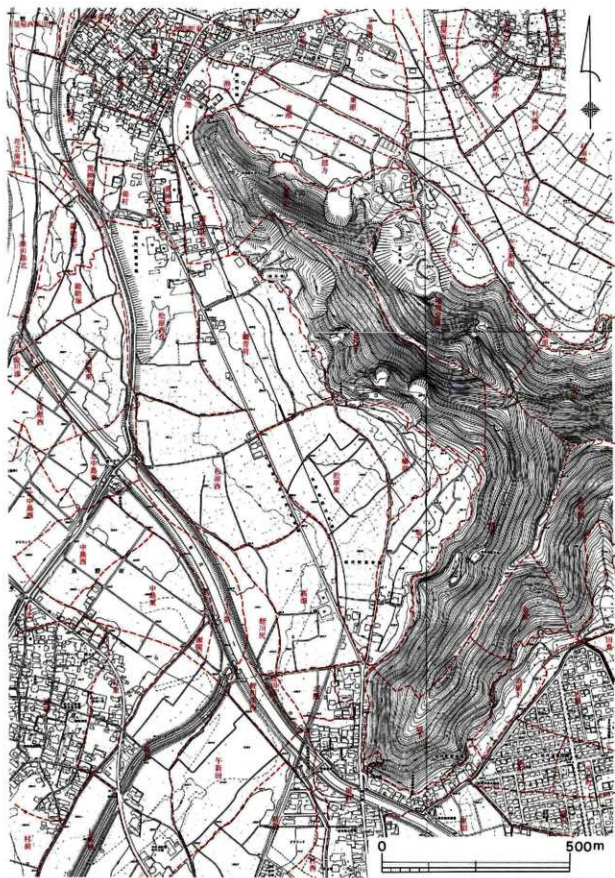
(2) 文献史学的環境

平安中期の、我が国で最初の分類百科辞典ともいふべき『倭名類聚抄』にみえる「英多郷」は現在の松代一帯を指すと思われるが、松原遺跡の所在する長野市松代町東寺尾の地もまたこの郷に含まれていたと考えられる。「寺尾」の名の由来は、平安中期、応和年間(961-964)頃に存在したという天台宗補陀楽山観音院東福寺と伝わる(『更級郡誌』)が、『吾妻鏡』建久元(1190)年11月7日条に、源頼朝上洛の際、従った者の中にみえる「寺尾太郎」「寺尾三郎太郎」の名が文献上の初見であろう。しかしながら、中世以前のこの地に関する文献史料はごく少なく、断片的なものでしかない。

「寺尾」の名を冠する氏族がこの地を領し、今も城山山上に城跡を残す寺尾城を築いて史書にその姿を現すようになるのは中世以降のことである。寺尾氏は諏訪神氏の一族間屋氏の支族であるが、諏訪社上社頭役の勤仕に名をみせている(『諏訪御符札之古書』/『更級埴科地方誌』)。『高白齋記』天文19(1551)年9月23日条に「高梨政頼、村上義清、於半途対面、昨日寺尾ノ城へ取り掛ケラルルノ間、真田幸隆方ハ助シテ被越候」とみえる(『信濃史料』)。1550年の武田晴信(信玄)の戸石城攻めの際に、村上義清に叛し武田方についたため攻められた寺尾城へ、真田幸隆が救援に赴いたという記事だが、1553年、村上義清が武田晴信に敗れ、越後の長尾景虎(上杉謙信)を頼り落ち延びていった後(これが11年断続的に続く川中島の合戦の発端となる)、寺尾氏は武田方に属し、海津城築城の後には寺尾城もまた海津城東方の外郭城として機能した。1581年武田氏滅亡後は上杉氏に属し、慶長3(1598)年の上杉景勝の会津転封に従ったことが『上杉編年文書』中の「慶長三年会津へ御国替御家中知行目録」に「1650石寺尾源藏」の名がみえていることからわかる。豊臣秀吉によるこの措置は兵農の厳しい分離政策を含んでいた。すなわち、侍以下奉公人は一人残らず国替えに従うこと、そして検地帳に登録された百姓は一切連れて行くこと



第6図 松原遺跡周辺地形図(大正元年測量、S=1:50,000)



第7图 松原遺跡周辺字图 (S=10,000)

は許されなかったのである。これによって半兵半農の土地に残る地侍の存在は許されなくなり、寺尾城も廃城となったと思われる。こうして今は跡を残すのみとなった寺尾城であるが、後の慶長16(1613)年に開かれた北国東街道の鳥打峠の名は、かつて寺尾氏の拠城であったことからつけられたという。

金井山山頂にあり同じく城跡が残る金井山城も松原遺跡を見下ろす位置にある。寺尾氏の老家金井氏の居館跡とも、また越後の高梨某が金井氏を名乗り築いた城とも伝わるが(『松代町史』上巻)、いずれも確証を欠いている。

さて、武田氏の信濃進出により小笠原長時、村上義清らは領地を追われ、越後の上杉謙信を頼った。これがきっかけとなり川中島の地において両者が信濃の覇権を競うことになるわけであるが、松原地籍を含むこの一帯もまた、戦場の一角であったと思われる。前後5回のうち、もっとも激戦であった永禄4(1561)年の戦いで戦死したという山本勘助の首と胴を合わせたという胴合橋が付近にある。また、千曲川による墓の水没をおそれ元文4(1740)年勘助の墓を現在の阿弥陀堂地籍に移した松代藩士原正盛、鎌原重栄の碑文には「古墓今陣瀨ノ東高畑ノ中ニ在リ」、松原南方の地続きにある高畑の地にあったと記されている。かつて勘助の墓があったと伝えられるもう一つの場所、勘助塚地籍もまた同じく松原の北西地続きにある。

多少年代は前後するが叡山文庫蔵の天文23(1555)年書写の胎藏外部天衆に「於信州寺尾之福徳寺 長忍写」の記述がある。福徳寺は永享2(1430)年僧祐俊によって開かれ、後に僧意教が五帖山福徳寺を千曲川左岸の杵淵の地に建立した。その後兵火に罹ったため、寺尾の地に移り旧寺地にちなんで杵淵山と号した。永禄2(1559)年現在の地に移転したと寺記等にはある(『更級地籍地方史』)。16世紀半ばには寺尾の地にあったものと思われる。

近世にいたって慶長5(1613)年、森忠政が更級、水内、地籍、高井四郡を所領として海津城へと入城した。天正10(1582)年織田信長の北信制圧の際、この地の民衆に忠政の兄、森長可が反抗を受けたことがあり、忠政はかつての首謀者ら300人を断罪に処した。鳥打峠中腹、扇平地籍に今もその供養碑があり、近くの池には槍研の池の名がつけられているという。

本街道として開かれて以来、鳥打峠は明治維新の後も人々の往来の絶えるときはなかった。しかし明治25年県が道路改修工事を行なった際、坂の急勾配を緩和できず、交通運搬上に支障をきたすとして峠の山麓に沿った道路を新しく県道とすることになった。大正9(1922)年に開通したこれが谷街道、現在の県道中野更級線である。松原遺跡はこの県道の地下にもひろがっている。文献史料からこの地域の歴史をみてきたが、繰り返される発掘調査の中で、文献史料からはうかがい知ることのできない人々の暮らしが徐々に明らかとなりつつあり、信濃の原始、古代の間隙を一部なりとも埋めてゆくことであろう。

(山田美弥子)

引用・参考文献

- 長野県地籍部松代町役場 1929 『松代町史』上・下・続巻
角川日本地名大辞典編纂委員会 1990 『角川日本地名大辞典』第20巻
信濃史料刊行会 1957 『信濃史料』第11・12巻
長野県史刊行会 1989 『長野県史』通史編1
更級地籍地方誌刊行会 1978 『更級地籍地方誌』第2巻
長野市教育委員会 1991 『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集
長野県町村史刊行会 1936 『長野県町村誌』

第三章 調査成果

第1節 調査区の位置と概要

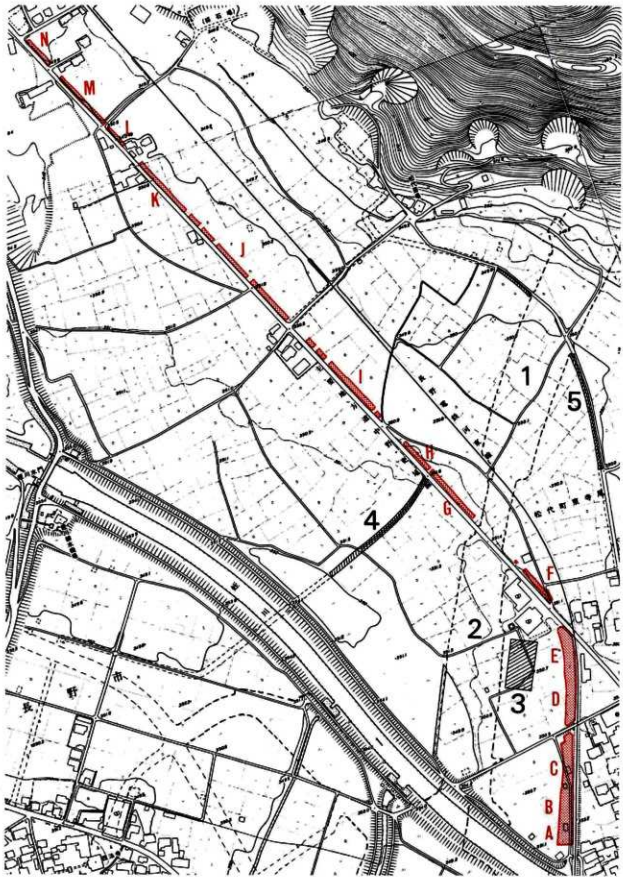
起因事業の性格上、調査区の設定は長大にならざるをえず、また複数年度にわたるため便宜的にA～N区の調査区を設定した(第8図)。この内A～E区までは新設部分、F～N区は拡幅部分である。A～E区は調査区の幅が13m以上確保でき、また泉埋文センターが実施した高速道地点や平成2年度に実施した農協地点とも近接しているため密集した遺構の検出が容易に予想された。調査区の位置から松原遺跡の南限の確認、各時代の集落の展開範囲、弥生時代河川の有無の確認などを主目的とした。拡幅部分は幅約5mと狭いため、松原遺跡の範囲確認を主目的としたトレンチ的な調査となった。以下各地区の概要を述べる。

A区は蛭川に接しており、松原遺跡の南限を把握できる位置にある。古代面(第1・2次面)ではSA9が南の端に位置し、現在の蛭川近くまで集落が展開していたことがうかがえる。弥生面(第3次面)では遺構はまったく存在せず、B区にある弥生時代の包含層が南に向かって薄く落ち込んでいく状況が看取できた。したがって弥生時代の遺跡南限はB区までとなる。B区の地表下約1mの古代面は竪穴住居跡11軒を検出したが、この内SA16～21の切り合い関係は浅いこともありはっきりしない。地表下約160cmにて検出した弥生面(弥生時代中期後半)は、竪穴住居跡、環状溝跡、溝、土坑などB・C区とも遺構が密集しており、重層的な切り合いを示している。C区の北側から南北方向に撓乱が走っているが、これは農道敷設時の所産と考える。C区より唯一中世と思われる溝跡(SD1・2)が2条検出された。古代面では土壌墓を4基検出したが住居跡は3軒のみで、集落域から墓域と変化する地点と思われる。

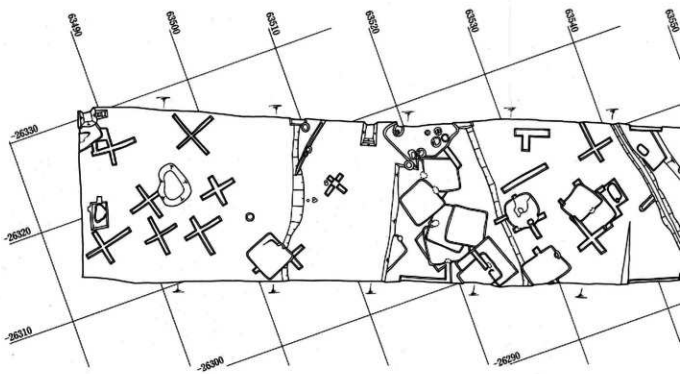
D・E区はともに平安時代中期面(第1次面)が良好に検出できた区である。C区同様古代の住居跡は少ないが、奈良時代末～平安時代前期面(第2次面)から製鉄関係遺構(SQ1～10)が検出された。ただし、調査区の中央付近に地層の落ち込みが見られることから1・2次面は広義に捉えたほうがよいと思われる。地表下約120cmの第2次面では3条の溝跡(SD14～16)が併行し、あたかも弥生時代の環壕のようである。地表下約180cmの弥生面では環状溝跡が竪穴住居跡と切り合いを持たず良好に検出された。住居跡は少なく、土坑、溝跡が多数見られ、土壌墓1基(SJ11)も検出した。検出面が東側に向かって多少傾斜していることから、西側の居住域から墓域、さらに低湿地帯へと移行する地点であろう。

F区以降の調査区では拡幅部分となるため十分な安全勾配が確保できず、弥生面はトレンチ調査となった。G区では古墳時代末～奈良時代と思われる竪穴住居跡を検出した。H区より北側の調査区では各時代とも遺構は少ない。弥生時代の遺構は当区を北限としているようである。各調査区とも弥生面のあるべき深さには砂層が堆積し、集落経営を阻む自然条件が予想される。古代の遺構もI区より北側ではJ区、SA31まで遺構は存在せず、J₁～J₂区まで河川跡と思われる砂礫面を検出するのみで遺物はまったく出土しない。したがってSA31～36は松原遺跡としてではなく、別の遺跡(あるいは集落)として捉えたほうが理解しやすいのではないだろうか。N区では時期不明であるが畦畔状遺構が検出されている。松原遺跡の北側に向かって標高が低くなっていることを考えると、生産域が松原遺跡の北側に展開する可能性も考えられるであろう。

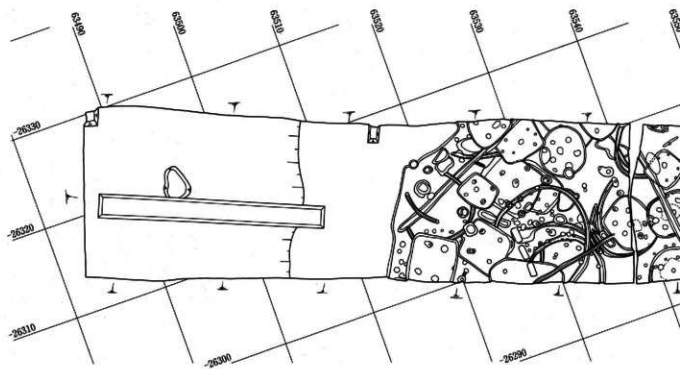
いずれにしても東寺尾一帯は、近世まで山沿いに流路を取っていたように千曲川氾濫原であり、単純に自然堤防上に立地するとは言いがたい。弥生中期には集落内を河川が蛇行していたことも考え合わせ、氾濫原上の遺跡の在り方の一例を示していると思われる。



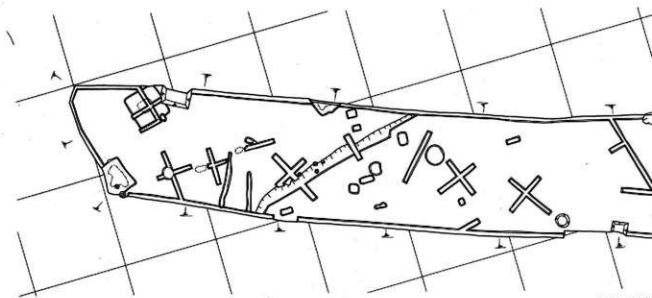
第8図 調査区および既往調査地点位置図



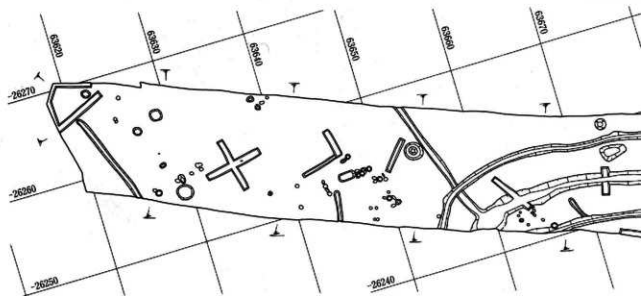
A-CK 1·2



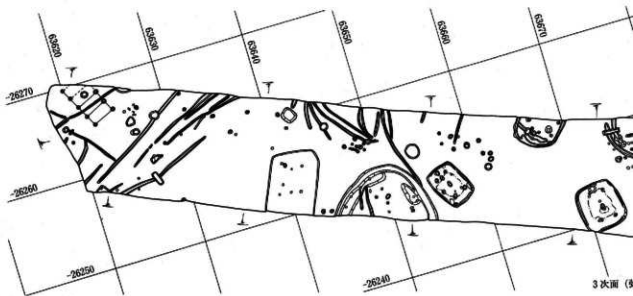
A-CK 3次



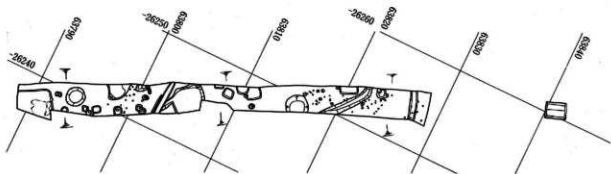
1次面 (古代)



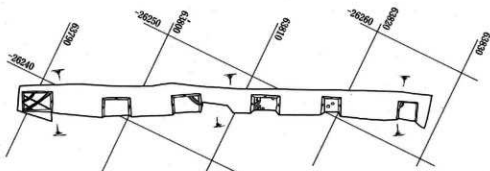
2次面 (奈良時代末)



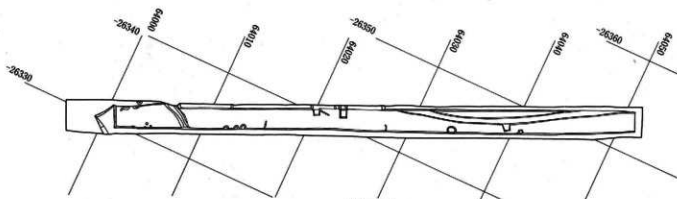
3次面 (平安時代)



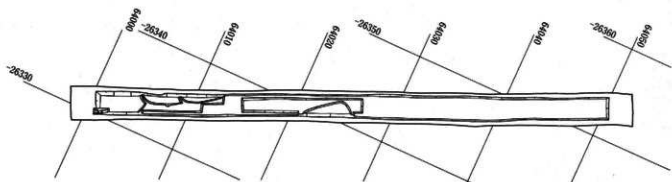
F区 2次面



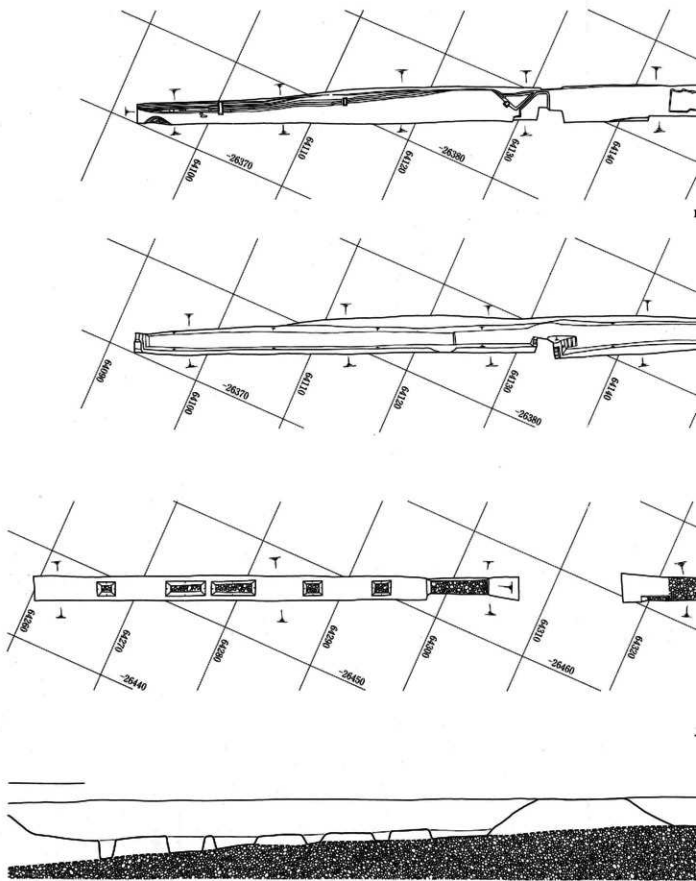
F区 3次面



H区 2次面



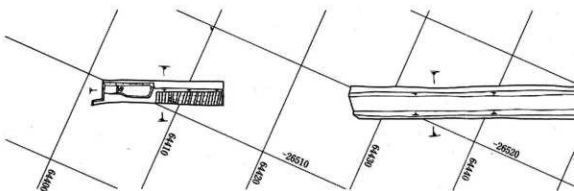
H区 3次面



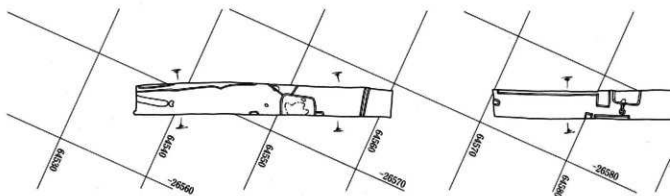
第12图 I·J区



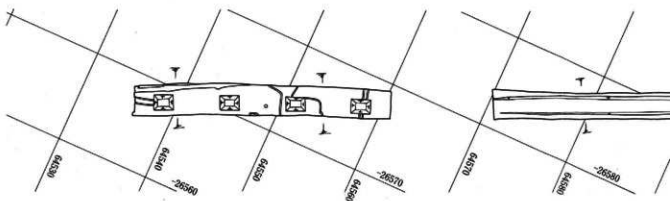
J,区 2次面



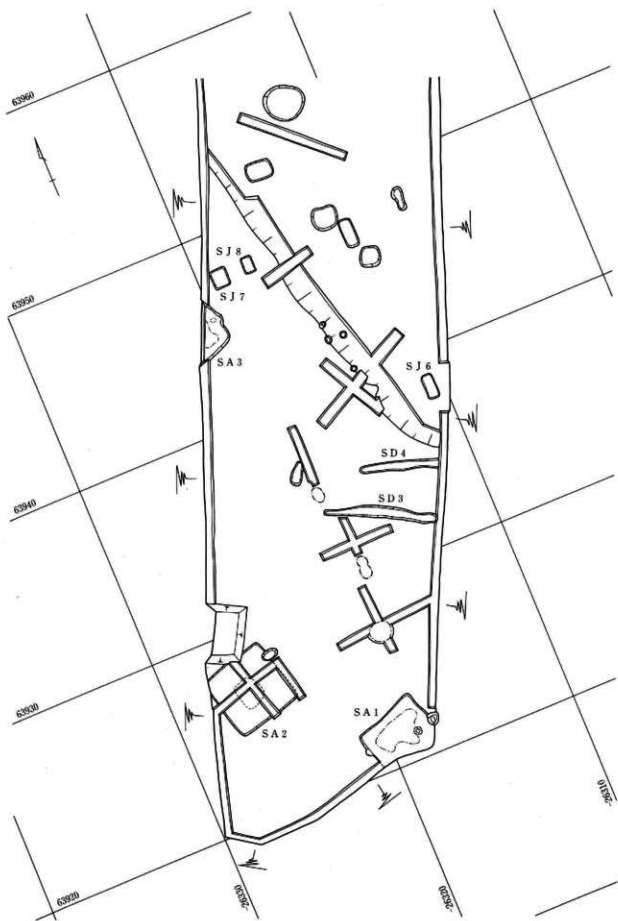
J,区 3次面



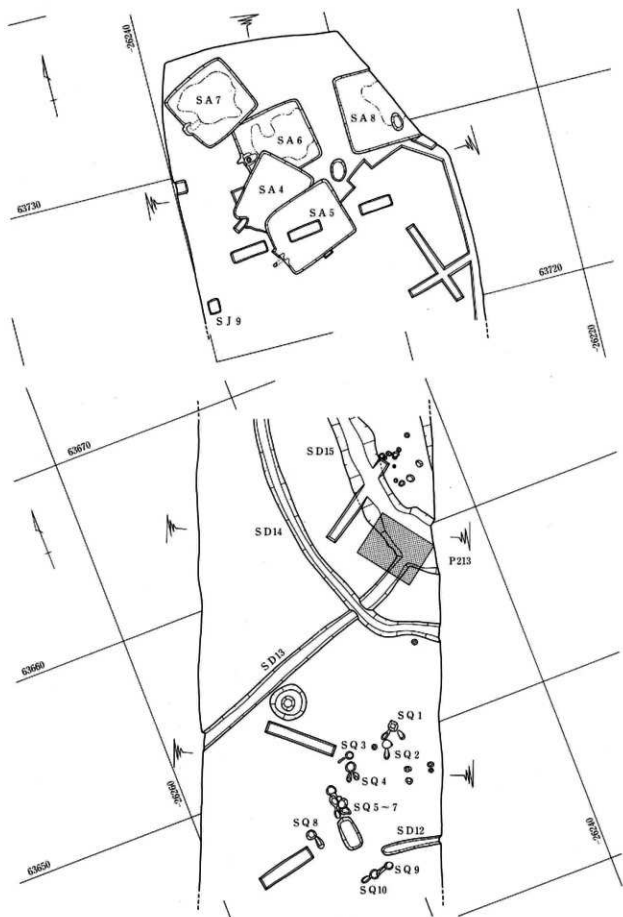
L,区 2次面



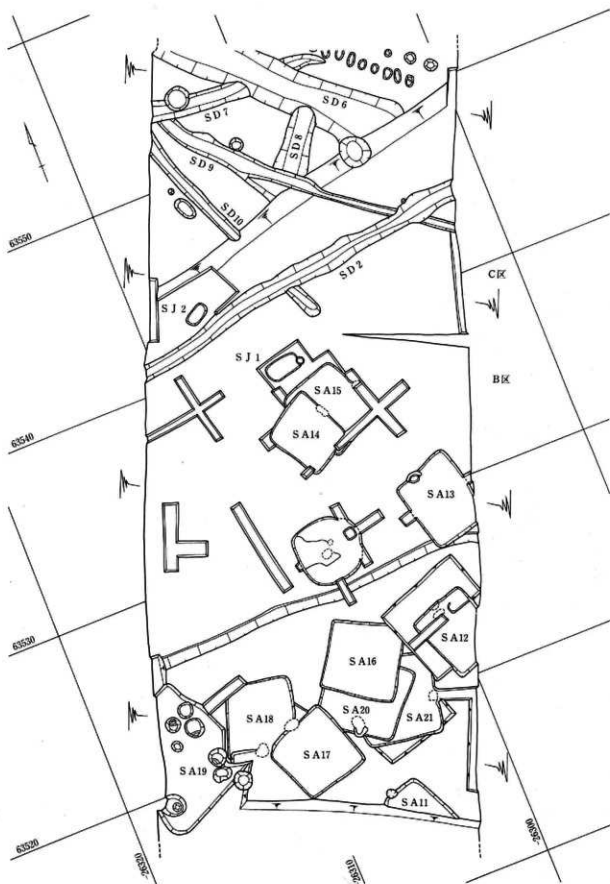
L,区 3次面



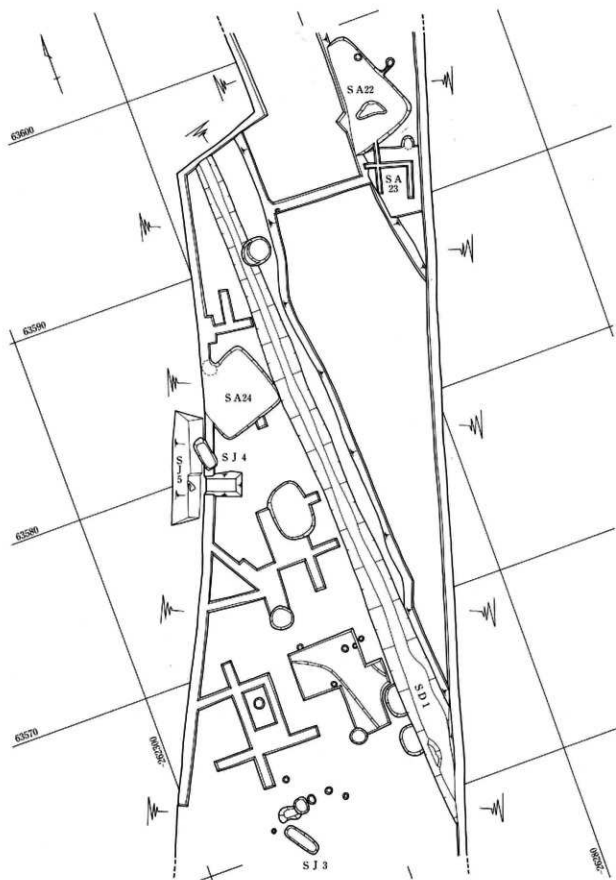
第14图 D区1次面遗物分布图 (S = 1 : 200)



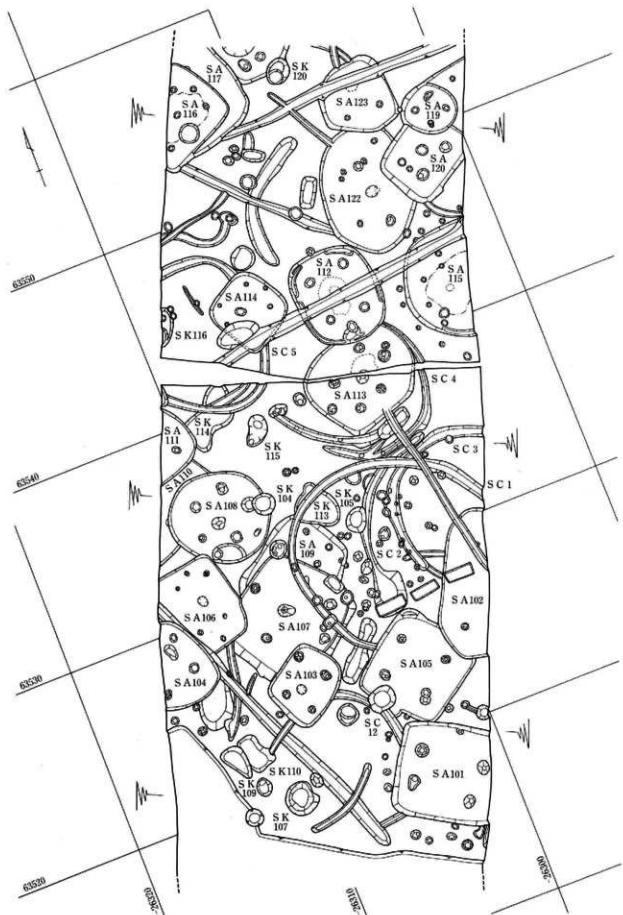
第15图 E区1次面·D区2次面遺構分布図 (S=1:200)



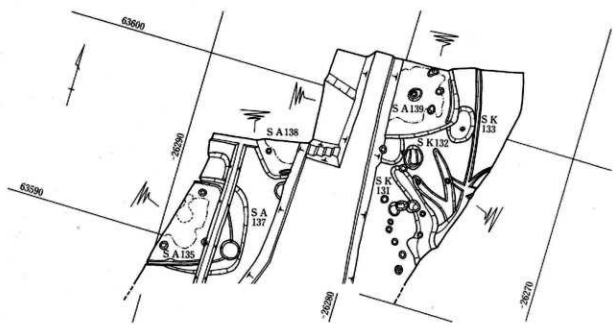
第16图 B·C区2次面遺構分布图 (S = 1 : 200)



第17图 C区2次面遗構分布图 (S = 1 : 200)



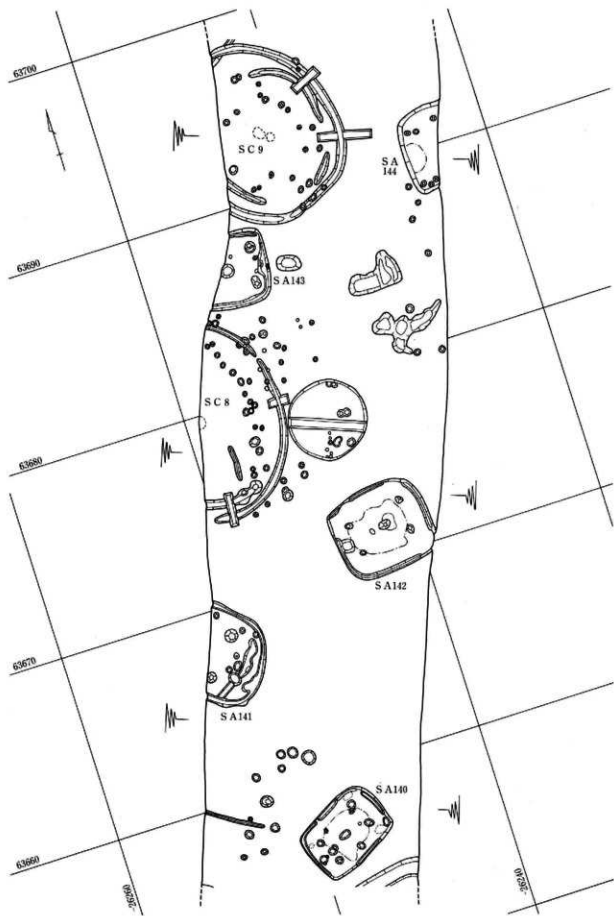
第18图 B·C区3次面道横分布图 (S = 1 : 200)



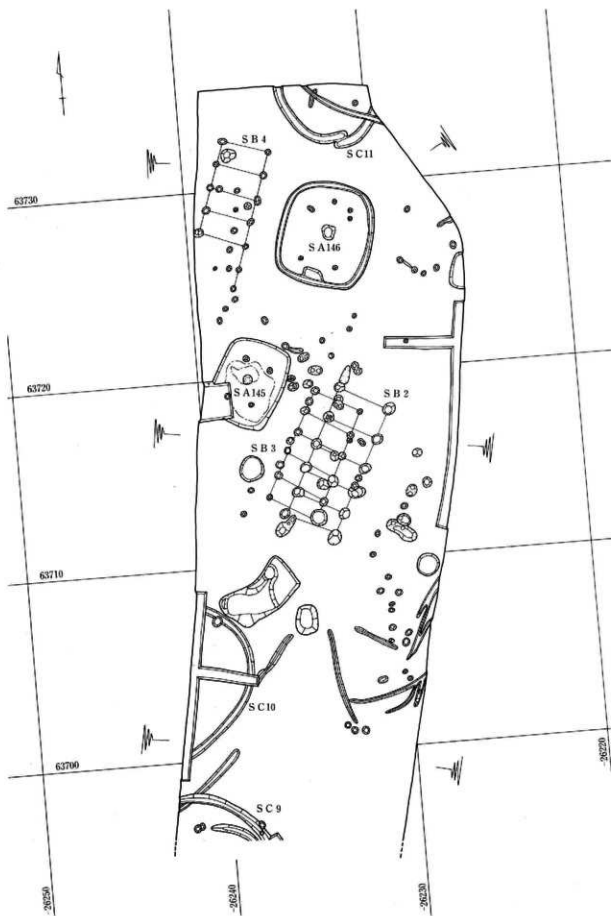
第19图 C区3次面遺構分布图 (S = 1 : 200)



第20图 D区3次面遺構分布図 (S = 1 : 200)



第21图 E区3次面遺構分布図 (S = 1 : 200)



第22图 E区3次面遗物分布图 (S = 1 : 200)



写真15 A・B区1・2次面(北から)



写真16 C区2次面(北から)



写真17 D区1次面（南から）



写真18 E区1次面（南から）



写真19 D区2次面 (北から)



写真20 E区2次面 (北から)



写真21 A・B区3次面（北から）



写真22 C区3次面（北から）



写真23 D区3次面（北から）



写真24 E区3次面（北から）



写真25 F区2次面(北から)



写真26 F区2次面(南から)



写真27 G区2次面(北から)



写真28 G区2次面(南から)



写真29 H区2次面(南から)



写真30 H区3次面(南から)



写真31 I₁区2次面(南から)



写真32 I₁区3次面(北から)



写真33 I区全景



写真34 I₁区3次面(南から)



写真35 I₁区2次面(北から)



写真36 I₂区3次面(北から)



写真37 I₁区2次面(北から)



写真38 I₁区3次面(北から)



写真39 J区(北から)



写真40 J区(北から)



写真41 J区(南から)



写真42 J区礫層検出状況



写真43 J区礫層近景



写真44 J₁区2次面(南から)



写真45 K₁区2次面(南から)



写真46 K₁区3次面(南から)



写真47 K₂区2次面(南から)



写真48 K₁区3次面(北から)



写真49 L区2次面(北から)



写真50 L区3次面(北から)



写真51 M区2次面(南から)



写真52 M区3次面(南から)



写真53 N区2次面(北から)



写真54 N区3次面(北から)



写真55 N区2次面、蛙呼状遺構

第2節 基本層序

基本層序は松原農協地点とほぼ同様の堆積状況を示している(第23図)。千曲川氾濫原、自然堤防上に立地している性格上、砂質土層が主に堆積し、J区を除いて礫石の混入はほとんど見られない。A～E区は基本層序とどりの堆積状況を示している。松原農協地点との相違は、弥生面で検出した環状溝跡が、その1層上から掘り込まれている可能性がある点である。SC8・9に見られる中心の焼土痕は遺構面より若干高めであり、弥生時代中期後半より若干新しくなる可能性がある。しかし溝理土に含まれる土器片は中期後半であり、また基本土層第7層が漸移層であることを考慮に入れると、大きな時間幅は考えにくい。

A区からE区に向かって若干下がり気味であるが、基本層序に大きな変化は見られない。しかしG区では第4層から下層は若干様相を異にする。各層位の厚さが増し、古墳時代末～奈良時代の包含層が堆積している。したがって弥生時代中期後半の遺構面は地表下約210cmとなっている。拡幅部分のJ～N区の平安時代遺構面の下層では砂層が展開しており、平安以前の包含層はまったく見られない。この砂層は基本的に千曲川によって運ばれてきた茶灰褐色系の細かい砂であるが、場所によっては犀川流域に見られる灰白色の粗砂が堆積しており、犀口を起点とする川中島大規模扇状地を形成した犀川の暴れぶりを物語っているようである。

第12・24図においてJ₁～J₂区で検出した砂礫層を図示した。J₁・J₂区で南に向かって緩やかに傾斜しているが、J₂区ではそれまでの緩やかな傾斜が北側に急激に落ち込んでいる。緩斜面を滑走面、急斜面を攻撃面と考えることもできよう。この他では砂礫面は確認されておらず、遺構のないことも合わせ考えると、河川跡として認識できるのであろうか。ならば先述したSA31～36は松原遺跡とは河川を挟んだ位置にあり、別の遺跡あるいは集落として考えるのが妥当であろう。

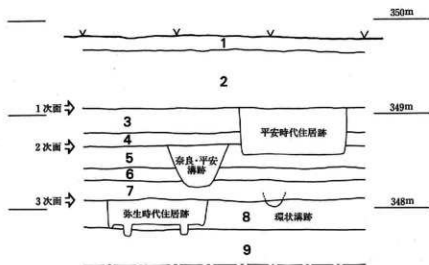


写真56・57 J₁区礫層検出状況



写真58・59 J₁区礫層検出状況

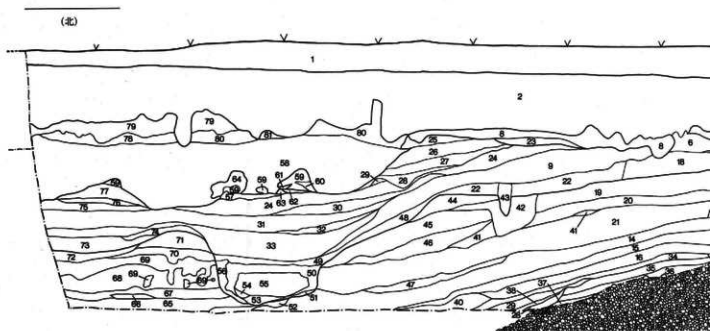




第23圖 基本土層柱狀模式圖

基本層序土層名

1. 表土層 (畑地耕作土)
2. 茶褐色土層
3. 暗茶褐色土層
4. 淡茶灰色土層 (漸移層)
5. 明黃褐色砂質土層
6. 黑灰褐色土層
7. 淡灰褐色土層
8. 黃褐色砂質土層
9. 灰褐色砂質土層



第24圖 J₃区東壁土

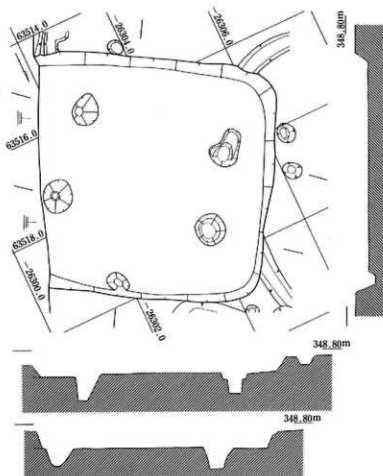
第3節 弥生時代中期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡 (S A101~152)

S A101 (B区)

調査区の南隅で検出され、S A105・S C12と重複関係にある。住居南東部分は調査範囲外で未検出なため判然としなが、約5mの方形を呈する住居跡である。主柱穴は4本長方形配列となるが穴は検出されず、床面は比較的明瞭であったが全体に軟弱となる。また当住居跡の南西(A調査区)では該期遺構がまったく検出されておらず、本遺構付近を南限とする遺跡範囲が想定できる。

土器はそのほとんどが床面より若干浮いた状態で出土している。出土土器〔第26図〕には壺(1・9・10)、甕(2・5・12・13)、台付甕(6・11)、鉢(8)、瓶(7)がある。4・5は明瞭な受け口状口縁となる。口縁部に縄文、頸部には簾状文を施し内面は全体的に丁寧にヘラミガキで調整される。11は頸部に簾状文、口縁部と胴部に波状文を施文したのち縦方向に直線文で区画しボタン状貼付文を施すが、現状で4カ所にみられる。形態などから台付甕と考えられる。8は全面に赤彩が施される。



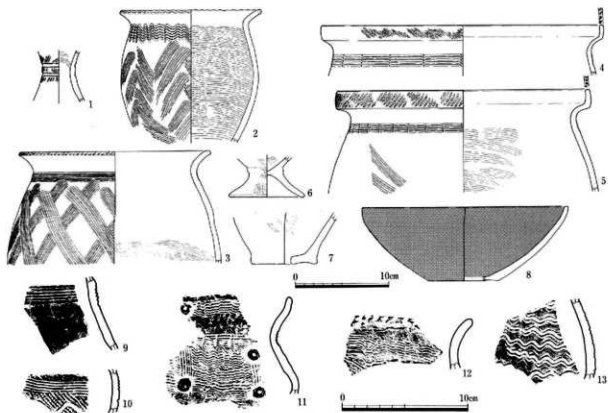
第25図 S A101実測図



写真60 S A101遺物写真



写真61 S A101



第26図 SA101遺物実測図

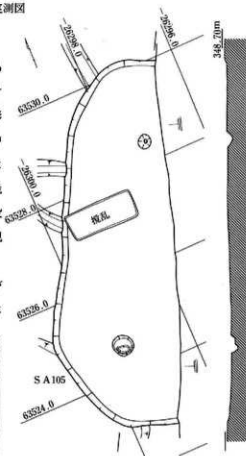
SA102 (B区)

SA105・SC3と重複関係にある。東側半分は未検出であるため住居平面形は不明瞭であるが、長軸7.82mを測る隅丸長方形を呈する大形の住居と想定される。主柱穴は2本検出されおそらく長方形配列となるものと思われ、今は範囲内において確認されず、また中央付近には擾乱を受ける。この住居はいわゆる焼失住居で床面には炭化材や焼土塊が住居全体に多量に検出された[第29図]。土器は焼土塊等の上面に一部集中的に出土している。住居の焼失後に一括投棄されたような状態で出土しているため土器への二次的な被熱は観察されない。

出土土器 [第28図] には壺(1・5・7・9)と甕(6・10・12)がある。1と4の頸部は縄文を地文としてのちに沈線文を施す。3は

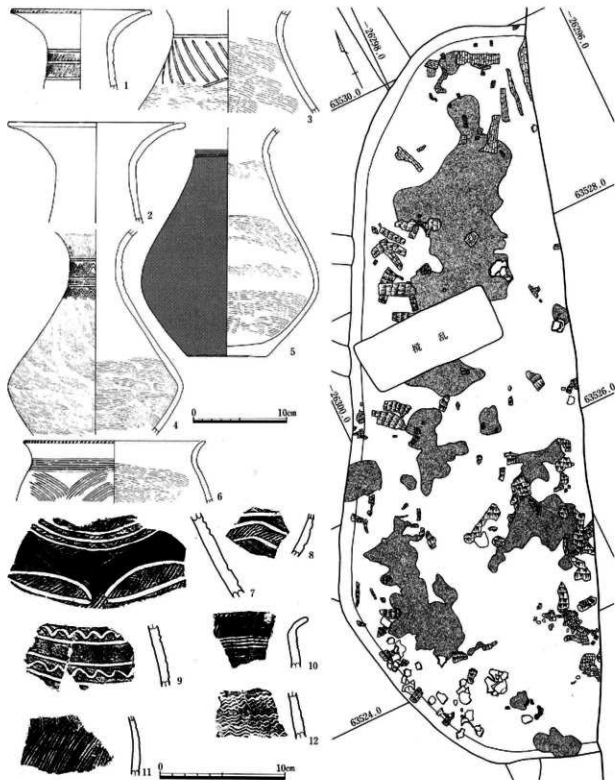


写真62 SA102



第27図 SA102実測図

斜方向の沈線を巡らす、その下に1本逆行する沈線も見られることから、鋸歯文を意識した文様としてとらえることもできる。壺は主に頸部への集中的施文が目立ち全体的に太頸である。斐の出土は極めて少ない。6は単純口縁となり頸部に直線文を施し胴部は羽状文を施文する。内面は全体にハケ調整がされ、のちに軽いヘラミガキで仕上げられる。12は頸部付近の破片で波状文を施文する。



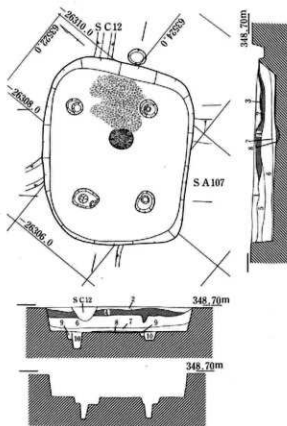
第28図 SA 102遺物実測図

第29図 SA 102遺物出土状況 (S = 1 : 40)

SA103 (B区)

SA107・SC12と重複関係にある。3.88m×3.16mを測る方形住居である。主柱穴は4本方形配列となる。炉は住居中央よりやや東へずれて位置し床面より5cm程の深めに掘り込んだ炉となる。床面は炉を中心として堅緻となる。土器は比較的多く出土しているが、その大半は住居覆土中に厚さ10cm前後の炭化物層 [第30図断面図第4層]、その上層に焼土層 [同第3層] が検出されたこの層中より出土しており、いずれも二次的の被熱によって変形したものや粉々になったものが多くみられる。出土状況等から半ば埋まりかけた竪穴内を廃棄場として利用したものであろう。焼失住居とは区別しておく。

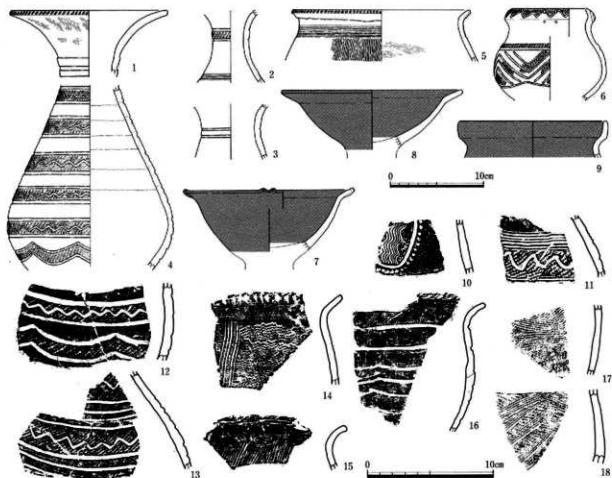
出土土器 [第31図] には壺 (1~4・10~13)、甕 (5・14~18)、鉢 (6・9)、高杯 (7・8) がある。壺は全体に細頸である。4は縄文施文ののち沈線で区画しその間に山形文を施文するといった単位の文様帯を多段に施す文様構成となる。6の鉢は口縁部が内湾する受け口状を呈し、2ヶ一對の小孔を横に穿つ。胴部は縄文を施したのち重山形文を施文する。7・8は高杯の杯部で端部が舌状に外反する。7の口縁端部には突起が見られる。



第30図 SA103実測図



写真63 SA103

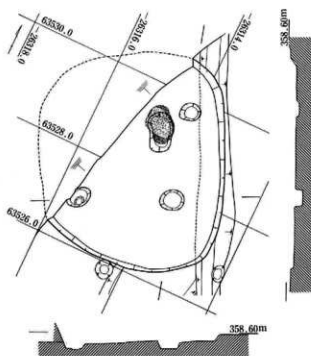


第31図 SA103遺物実測図

SA104 (B区)

SA106と重複関係にある。住居西側が調査範囲外であるため未検出であるが、隅丸方形を呈する住居跡と想定される。主柱穴は3本検出され、平面形は方形になるものと思われる。竈は深さ3cm程の地床竈で、住居中央よりかなり北へずれて位置する。床面は比較的明瞭であったが全体に軟弱で、竈付近に若干の高まりを持ち南側にやや傾斜する。

出土土器〔第33図〕には壺(5~9)、甕(1・2)、台付甕(3)、高杯(4)がある。壺はすべて胴部付近の小破片で、7は頸部それ以外は胴部付近のものである。1と2は同一個体で内面は丁寧にヘラミガキする。3は胴下半部から脚部にかけての破片で、「コ」の字重ね文を施文する台付甕である。4は全面に赤彩が施された高杯の杯部であるが、口縁部が折り返され内面は有段口縁となる。



第32図 SA104実測図

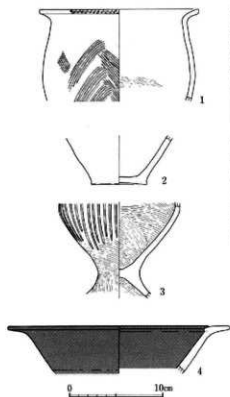


写真64 SA104

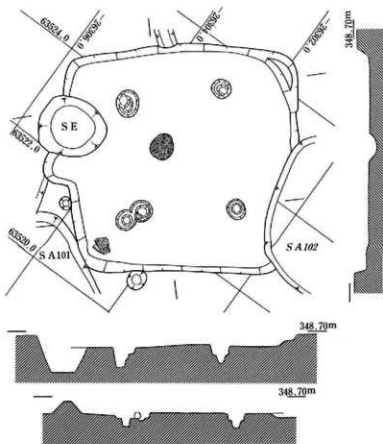


第33図 SA104遺物実測図

SA105 (B区)

SA101・102・SC1と重複関係にある。4.83m×5.00mを測る方形住居である。主柱穴は4本検出され方形配列となり、すべてに柱痕が伴う。炉は住居のほぼ中央に位置し、床面から15cm程の深く掘り込んだ炉となり炭化物が堆積していた。床面は炉を中心として柱穴配置範囲内において非常に堅緻となるが、その他は軟弱である。

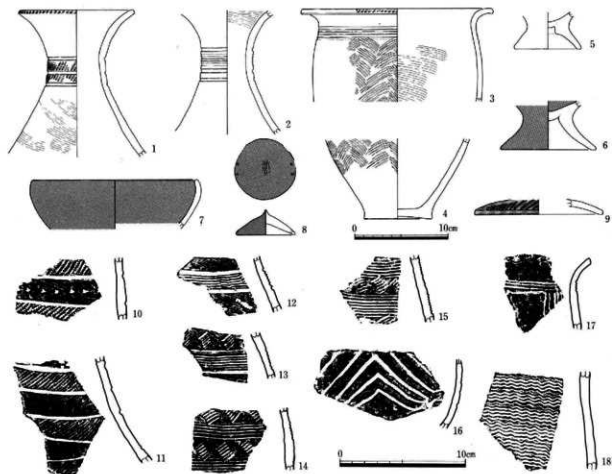
出土土器〔第35図〕には壺(1・2・10-16)、甕(3・4・7)、台付甕(5)、高杯(6)、鉢(7)、蓋(8・9)があり、比較的多く出土している。壺は全体に細頸である。3・4は同一個体で5は台付甕の脚部であると思われる。8は中央に抓みを持ち2ヶ一対の小孔を穿つ。9は斜方向の沈線文を施す。



第34図 SA105実測図



写真65 SA105

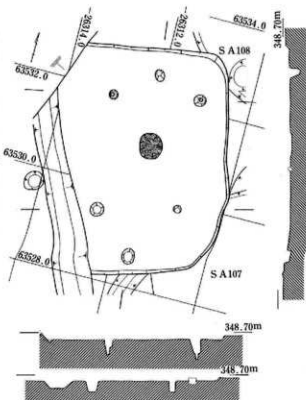


第35图 SA105遺物実測図

SA106 (B区)

SA104・107・108と重複関係にあり、主軸方向4.80mの長方形住居である。主柱穴は4本検出され平面形は長方形を呈し、また主軸上には2本の支柱穴が配される。竈は住居中央に位置し、若干の深みをもつ地床竈となる。床面は全体に堅緻であるが壁際にいくにしたがって軟弱となる。当住居跡は焼失住居と考えられ、床面上には夥しい量の炭化物が出土し、床は所々被熱による影響で硬く変質している〔第37図〕。出土する土器のほとんどは床面に接することはなく、炭化材の上より住居全体に散乱して出土している。土器そのものには二次的被熱による変質はみられないことから住居焼失後投棄されたものであろう。

出土土器〔第38・39図〕には壺(1・11・20・21)と甕(12・19・22~24)がある。壺は全体的に太頸で文様帯も頸部と胴部に集中的に施文される。文様の無い部分はハケ調整されたのち若干のヘラミガキを施す。7と20は胴上半部に沈線文で区画した中に構挿文を施す懸垂文を施文する。甕は構挿文を中心とした文様構成となる。12は頸部に波状文胴部に羽状文を施文する甕で胴部が大きく張り出す。15は頸部から胴部にかけて縄文のみを充填する。



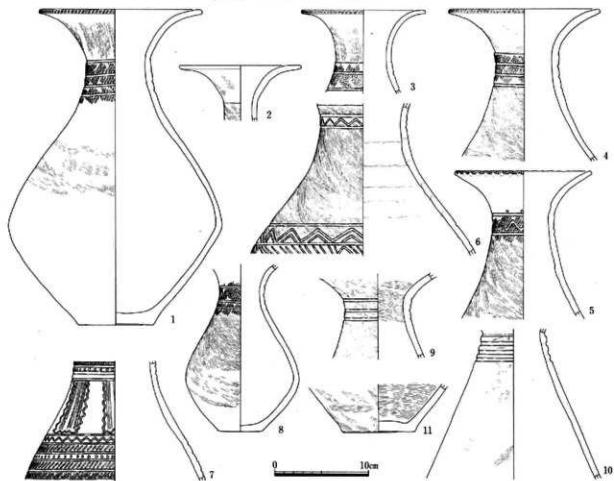
第36図 SA106実測図



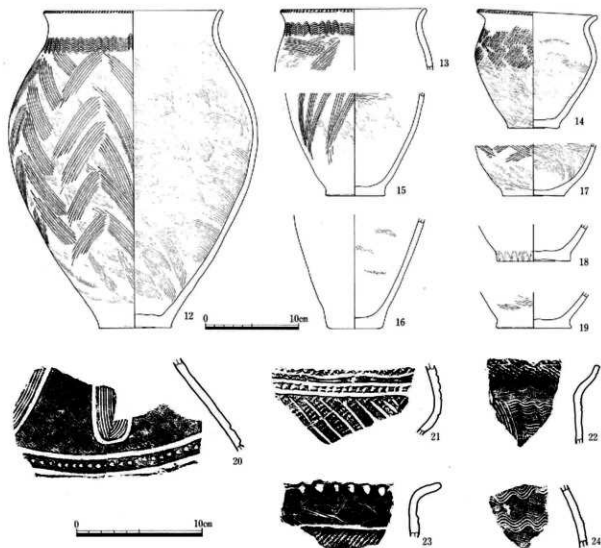
写真66 SA106遺物検出状況



第37図 SA106遺物出土状況 (S = 1 : 40)



第38図 SA106遺物実測図 (1)



第39图 SA106遗物实测图(2)

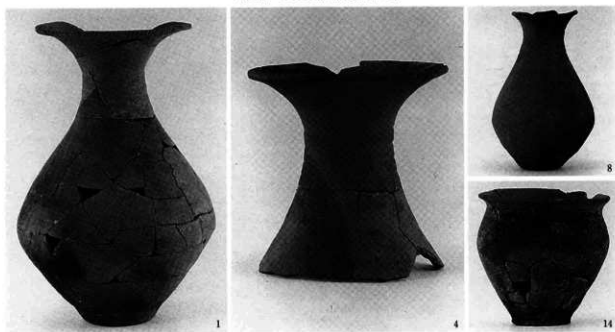
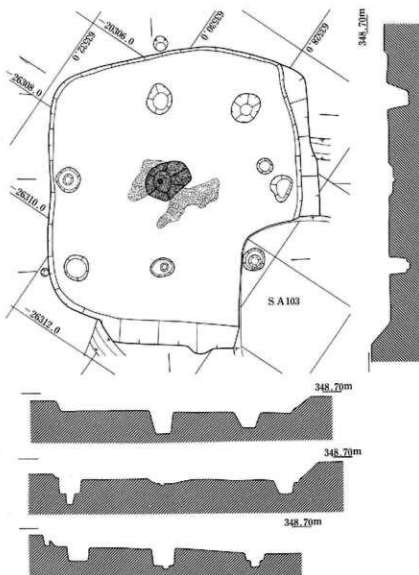


写真67 SA106遗物写真

SA107 (B区)

SA103・106・109・SC1と重複関係にある。6.34m×5.33mを測る方形住居である。柱穴は総数8本検出されたが、そのうち主柱穴となり得るものは7本を数える。北隣の床面は平安時代の井戸による破壊を受けるため柱穴の有無は不明であるが、平面形は方形を呈するものと思われる。炉は住居の中央に位置し床面より12cmの深く掘り込んだ炉となる。炉の周辺には炭化物が広がっており、床面は全体に軟弱である。

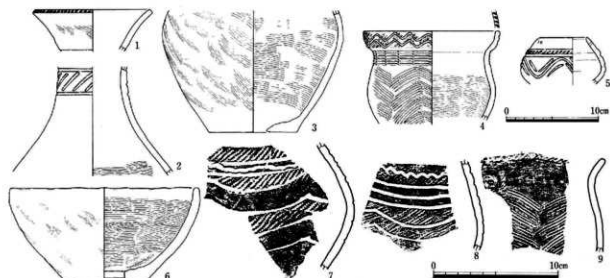
出土土器 [第41図] には壺 (1～3・7・8)、甕 (4・9)、鉢 (5)、瓶 (6) がある。3の底部には直径3cm程の穿孔がされており、焼成後に穿たれたものである。4は受け口状を呈する口縁部に縄文を施したのちに重山形文を施文し、頸部に雁状文、胴部に羽状文をそれぞれ施す。5は口縁部が内湾し2ヶ一對の小孔を持つ小型の鉢である。



第40図 SA107実測図



写真68 SA107

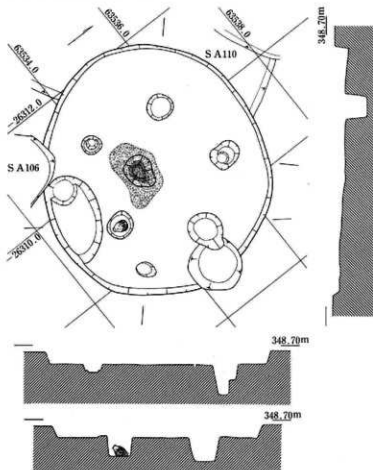


第41図 SA107遺物実測図

SA108 (B区)

SA106・110と重複関係にある。径5.30m程の円形住居である。主柱穴は5本検出され、平面形は五角形を呈する。炉は住居中央よりやや南にずれて位置し、床面を深く掘り込んだ炉となる。炉の周辺には炭化物が広がっており、床面は全体的に堅緻となる。

出土土器 [第43図] には壺 (1・2・11~18)、甕 (3~7・19~25)、高杯 (8)、鉢 (9・10) がある。1は受け口状を呈する太頸壺で、口縁部に縄文を施す。3はPit内より底部を上にした状態で出土した甕で、口縁端部は縄文を施したのちユビオサエによる波状口縁となる。胴部には一部分に波状文を施文したのち中断し、それを消すような形で羽状文を全体に施文する。その下には篋状の工具による列点文を巡らす。7は口縁端部に篋刻みが施されるため弱い波状口縁となる。頸部には簾状文を施し、髹描直線文を縦



第42図 SA108実測図

方向に区画したのち波状文を施文する。胴部には3と同様篋列点文を施す。これら出土した土器群は中段階に位置付くものであるが、7のように古段階から中段階にかけて頻繁にみられる胴部に篋列点文を施す甕を意識した文様構成を持つ甕の頸部に簾状文を施文する例等は、簾状文施文の出現時期を考える上で良好な資料となろう。



写真69 S A108

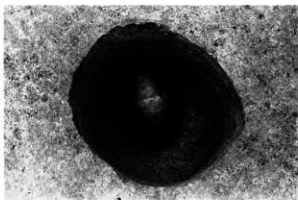
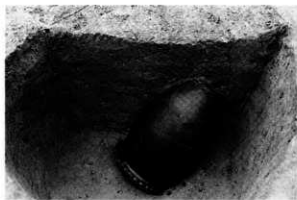
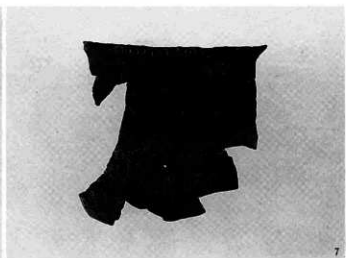


写真70・71 S A108Pit内発掘品検出状況



3



7

写真72 S A108遺物写真